

成川式土器の分類と編年

松崎 大嗣

Classification and chronology of Narikawa-style pottery

MATSUSAKI, Hirotsugu

Abstract

This study aims to classify Narikawa-style pottery and to establish its chronology through attribute analysis. It does so using Narikawa-style pottery recovered from 95 sites located in southern Kyushu.

The results indicate that pottery from the Late Yayoi to the Early Heian period can be divided into 10 phases. The new chronology proposed in this paper is roughly consistent with the chronology of other regions (northern Kyushu region, southern Miyazaki prefecture).

The refined chronology proposed here and the reexamination of Sasanuki Type I might help reveal a causal link between the end of Narikawa-style pottery and the spread of Ritsuryo-style pottery in the southern Kyushu region.

Keywords : Narikawa-style pottery, classification, chronology, process of the end of Narikawa-style pottery

要旨

本論の目的は、成川式土器を分類し、土器編年を構築することである。対象資料は、九州南部に分布する95遺跡から出土した成川式土器で、属性分析という方法を用いて分析を行った。

結果、弥生時代後期から平安時代前期までの土器を10期に区分でき、他地域（北部九州地域、宮崎県南部地域）の土器編年とも併行関係を整理することができた。今後は、この編年を基盤としながら、笹貫I式の土器様相の再分析も進めることで、成川式土器の終焉過程と律令期の土器様式の普及過程の関係を明らかにしたい。

キーワード：成川式土器、分類、編年、成川式土器の終焉過程

1. はじめに

本論の目的は古墳時代から平安時代前半期にかけての成川式土器を分類し、編年を構築することである。成川式土器とは九州南部の古墳時代から古代における在地土器様式の総称であり、古墳時代に入っても甕は丸底化せずに脚台が残る点や、甕・壺に装飾が施される点など、概して弥生時代の伝統を古代まで存続させていることに特徴がある。成川式土器の編年は1987年に中村直子によって提示されたものを基礎としており（中村1987）、この編年をもとにした遺跡の年代的な位置づけや比較、遺構の変遷など様々な研究に利用されてきた。近年では、他地域の土器様式との併行関係を知り得る資料が増加したことにより、とくに古墳時代前半期につ

いては年代的位置づけの再検討が精力的に行われている（久住2015, 橋本2018）。一方、古墳時代後半期以降の成川式土器の様相については不明瞭な点が多く、なかでもその終焉過程については、地域差をもちながら7・8世紀代を中心に律令制期の土器様式へと徐々に転換することが想定されてきたが（下山1995）、近年の新出資料の蓄積によりその様相はより複雑になっている。

当該期の九州南部の社会は、国制施行へ反発する九州南部の人々と朝廷との間でいくつかの争いが起きたり（中村1998, 永山2009）、律令制の普及を促す目的で肥後国や豊前・豊後国から薩摩・大隅国への移民政策が実施されるなど（永山2009, 2011）、在地伝統的社会から国家的社会へと変わる大きな社会変革があった過渡期として位置づけられる。しかし、これらの社会変革が考古学的に示されてきたとは言い難い。その理由の一つに当該期の土器編年が確立されていないことがあげられる。そこで、筆者は成川式土器の終焉過程から、九州南部の古代社会の変遷過程を明らかにすることを研究の目的と見据え、本論では基礎資料となる土器編年を構築することを目的とする。

2. 研究史と課題

(1) 研究史

成川式土器はその形態的特徴から1960年代まで長らく弥生時代後期の土器様式として認識されてきた。しかし、その後の調査の進展により、須恵器や双孔棒状土錘など、古墳時代に位置づけられる考古資料との共伴関係が認められたことから（出口1973, 上村ほか1974, 河口1976, 平島1977）、古墳時代に帰属する土器様式と認識されるようになった。

そして、成川式土器が古墳時代に下ったことにより、反対に九州南部における弥生時代後期の土器様式が空白となった。この空白を埋めたのは南さつま市・松木藪遺跡の発掘調査であった（本田1980）。本田道輝は当初、出土土器の分析から山ノ口式→松木藪Ⅰ式・Ⅱ式→中津野式という弥生時代中期後半から終末までの変遷過程を想定したが、松木藪遺跡で検出された1号住居跡からは松木藪Ⅰ式に先行する特徴をもつ土器が確認された。本田はこれを「松木藪0式」として位置づけた（本田1984）。しかしその後、中園聡の型式学的検討により松木藪0式は肥後地方を主体とする「黒髪式」であることが明示された（中園2004）。これにより、弥生時代中期前半には九州南部全域で入来式土器が分布していたが、弥生時代中期後半に入ると、薩摩半島西岸に肥後地域から黒髪式土器が流入、大隅半島地域では入来式に継続する山ノ口式が成立、続く弥生時代後期には黒髪式の系譜を引く松木藪式、山ノ口式の系譜を引く高付タイプ（後の高付式）が成立するという変遷過程が明らかとなった。これらの研究が進展したことにより、弥生時代後期の空白については問題が解消されると同時に、続く古墳時代の成川式土器の編年作業も精力的に進められた（池畑1980, 多々良1981）。

成川式土器が古墳時代の土器様式との認識が一般的になる中、器形や文様に弥生時代的な要素を多く残している点などから地域色の強い土器様式として捉えられるようになり、そのような独自性の強い社会像を説明するために、しばしば「隼人」と「成川式土器」が結び付けられることもあった（平田1979）。この民族と考古資料を結びつける論説に対し、中村直子は年代比定の根拠となる土器編年を確立し、考古資料の年代的位置づけを行う必要性を説いた上で、

成川式土器の最新段階である笹貫式は、相伴する須恵器の年代観から6世紀後半を下限とすることが示された(中村1987)。これによって、成川式土器と隼人の存続時期が重ならないことが明確に示されただけでなく、排他的な土器様式と認識されてきた成川式土器について、様式中に小型精製器種を取り込んでいることや、土師器と型式変化を共有する器種があり、全国的な土師器の型式変化と連動している部分があるということもわかってきた(中園1988)。

このように、成川式土器の様式構造が少しずつ明らかになるなか、成川式土器に継続する土器様式については不明瞭な研究状況があった。この点について中園聡は、最新段階である笹貫式を最後に途絶し、7世紀代に入ると外来の土器様式へ劇的に転換したと推定した(中園ibid)。また、吉本正典も笹貫式とそれ以降の段階の土器様式は全く連続しないと考えられることから、笹貫式の下限で示される時期(早ければ7世紀前葉)に日常生活に大きな変化があったと考えた(吉本2006)。

しかし、指宿市十二町に所在する橋牟礼川遺跡において、開聞岳起源のテフラであるKm11(通称青コラ火山灰)を上層から掘り込んだ竪穴住居跡から笹貫式に位置づけられる土器が出土した(下山ほか1996)。それまで、青コラ火山灰の降下年代については、古墳時代～奈良時代説(彌栄1980)、6世紀から7世紀代説(下山1990)があったが、橋牟礼川遺跡で検出された大溝周辺において、須恵器台付長頸壺が火山灰に直接被覆する形で出土したことから、火山灰の降下年代と須恵器の年代は近いことが想定された。下山は、この須恵器台付長頸壺は中村浩による陶邑編年のⅢ型式3段階からⅣ型式1段階に位置づけることができ、絶対年代は7世紀後半であると推定した(下山1992)。よって、青コラ火山灰を上位から掘り込んだ竪穴住居内から出土した笹貫式は7世紀後半以降に位置づけられることとなり、7世紀後半まではこの伝統的な土器様式が指宿地域で維持されていたことが明らかとなった(下山1995)。

その後、志布志湾沿岸においても成川式土器と7世紀代の須恵器が相伴する安良遺跡や上苑A遺跡などが確認されたり(出口ほか2008, 相美ほか2012)、大隅半島西岸においても7世紀代に位置づけられる須恵器と相伴する後ヶ迫A遺跡が知られるようになった(鶴飼ほか1999)。また、近年の橋牟礼川遺跡の報告書においても青コラ火山灰層を上層から掘り込んだ住居跡が複数確認されており、この時期に橋牟礼川遺跡に集落が存在していることがわかっている(松崎ほか2018)。以上のことから、成川式土器様式中の最終段階である笹貫式の年代幅が古墳時代後期から7～8世紀まで大きく下がる結果となった。

この点について中村直子は、7・8世紀に位置づけられる笹貫式の特徴を整理し、笹貫式を古段階と新段階の二段階に区分した(中村2009)。笹貫式新段階の特徴として、①太くまばらな刻み目、②器面に残る接合線、③甕の器面に施されたミガキ、④甌、⑤杯、⑥小型化した高杯をあげている。この笹貫式新段階の設定により、年代を検討する際の指標となる須恵器が相伴しない場合でも、新古の関係性をうかがえるようになってきた。その後、笹貫式新段階の分析が進み、相美伊久雄は当該期の土器群について、須恵器の年代観をもとにした編年を提示した(相美2014)。さらに、志布志湾沿岸の土器群には併行する奄美群島の土器群と類似した特徴があることもわかってきた(相美2015)。また、小地域ごとの編年も示されるようになってきた(鎌田2009・2014)。

上記のように成川式土器の下限は、7・8世紀代を中心とすることが示されてきたが、指宿

市敷領遺跡の調査によって成川式土器の下限はさらに下る。敷領遺跡では、貞観16年3月4日（西暦874年3月25日）に起こった開聞岳噴火の噴出物である Km12（通称紫コラ火山灰）によって埋没したカマド付掘立柱建物跡が検出された（中摩ほか2015）。この建物内では、煙道をもたないカマドや板石をコの字に組んだ石組炉に丸底甕がかけられたままの状態で見出された。また、須恵器横瓶や須恵器・土師器の杯類が出土しており、当時の食器組成を示す一括資料として位置づけられる。注目されるのは、カマドの傍らで口縁部がゆるやかに外反する脚台付きの無文甕が出土したことである。この資料は成川式土器の笹貫式新段階の範疇に収まるものではなく、その型式学的特徴から、「敷領タイプ」として位置づけられている（松崎2019）。

以上の点から、成川式土器の終焉過程については、指宿地域において開聞岳起源のテフラがひとつの年代指標となるため、その様相が少しずつ明らかになってきており（中村2015）、7世紀後半の青コラ火山灰層から874年の紫コラ火山灰に挟まれた層中にその終焉を迎えることが想定されている（下山1995）。

(2) 研究の課題

上記の研究史から、成川式土器の「様式の崩壊（変換）過程」（下山1995：p.173）には九州南部の中でも地域差があることが示されてきた（下山 ibid）。近年の研究成果を概観すると成川式土器の終焉については、新出資料の蓄積によりその下限が大きく下がり、当初、成川式土器に後続する土器様式と考えられてきた古代の土師器類とも共伴する例が知られるようになってきた。

先述したように九州南部の古代社会は、7世紀後半から8世紀代を中心に律令制の普及や国府・国分寺の造営、それに伴う諸制度の導入、移民政策など様々な社会変革を迎える。そのため、成川式土器の終焉も上記のような社会的変革に伴って引き起こされた可能性もあるが、そのプロセスについては十分に検討されてきたとは言いがたい。近年は、掘立柱建物跡や土師器、須恵器、初期貿易陶磁器の普及状況からその様相を解明しようとする研究（川口2018）もあるが、在地土器編年が確立されていないため、不明瞭な点が多い¹⁾。

そこで、筆者は「成川式土器の終焉過程」を明らかにすることを研究の目的とし、本論ではその研究の基礎となる土器編年を構築することを目的とする。本来であれば、笹貫式段階の細分のみを目指すべきだが、その様式構造を明らかにしなければ成川式土器の特質解明には至らないと考えたため、弥生時代後期から平安時代までを分析対象とする。

3. 資料と方法

(1) 対象資料

九州南部における95遺跡から出土した成川式土器を中心に取り扱う（図1）。本稿における九州南部とは、鹿児島県本土域を中心とした地域を指し、一部熊本県南部や宮崎県南部の資料を用いることがある。対象時期は弥生時代後期から平安時代前半期までを取り扱い、中村編年の松木蘭式・高付式から笹貫式新段階を対象とする。なお、筆者は以前弥生時代後期から古墳時代前半期の土器編年について検討したことがあるが（松崎2017）、土器分類の方法や併行関係について問題点があったことから、今回の論文をもって修正版として提示したい。

(2) 分析方法

分析方法について説明する。まず、中村編年が提示された段階では資料数が少なかったことから検討できなかった「系統」に着目して形式分類を実施する。土器の分類については属性分

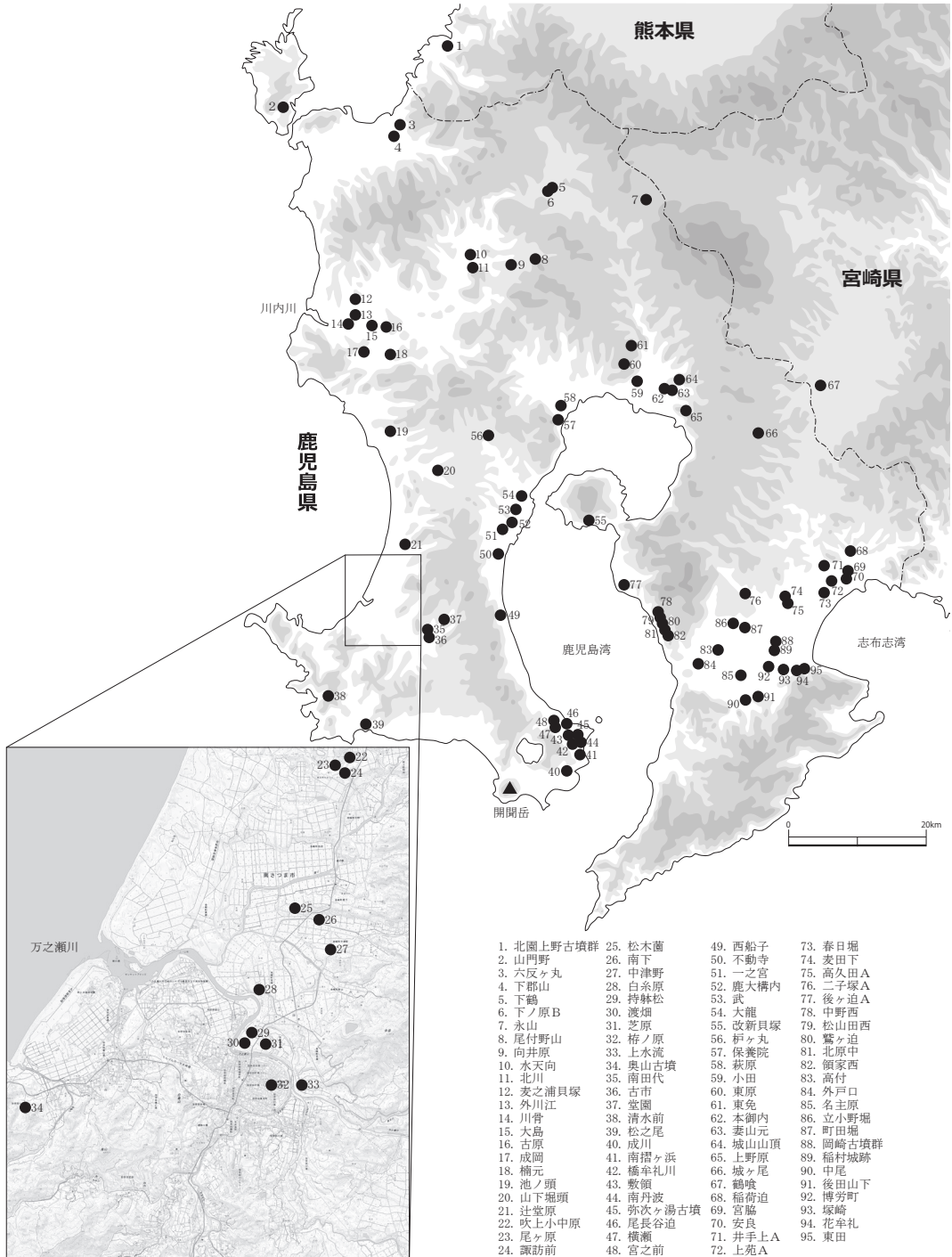


図1 対象遺跡

析という方法を用いる（田中・松永1984, 中村1987, 中園1999など）。属性分析とは、「属性を個々の単位に分解して資料操作を行う方法」（横山1985）であり、「個々の属性はそれ自体で単独に共存できず、諸属性は互いに結合してはじめて一つの個体をなす」（横山 *ibid* : p.69）という性質を利用する。属性とは考古資料そのものに備わる性質や特徴のことである。土器と言えば口縁部形態、胴部形態、底部形態などを指す。ただし、研究の目的や方法が異なると、調整技法や装飾、色調などに着目する場合もある。本論では時間的変化を有効に示すと考えられる属性に着目する。

分析の作業工程は、考古資料に見られる複数の属性を取り上げ、属性間の関係を検討するという順序で行う。具体的には、あらかじめ各属性において属性変異の型式学的組列の方向を推定するという作業を施したうえで、マトリクスを使って相関を検討するという方法である（中園1991 : p3）。

次に、各属性の組み合わせ頻度の多寡を相関表から読み取り、型式や型式組列を設定する。型式とは同じ形式に属する物を形質的特徴によって細分した分類単位のことであり（横山 *ibid*）、様々な属性の組み合わせにより成り立つものである。ただし、すべての属性がそろった資料は多くないため、本論における型式分類については、口縁部形態を基準とする。

その後、各型式ごとのまとまりや同時代性を読み取るために、遺構から出土する資料を対象として、共伴関係などを参考にしながら共時性が担保できる資料群を抽出し、様式を設定するという方法をとる。様式とは様々な型式組列を横断し、類似する特色を手がかりに型式を組み合わせたもので、時間的な同時性や一定の地域的空間を占めるまとまりのことである。それが実態として確認できるのは、厳密に同時代性が確認された一括遺物であり、様式の実在を検証することができる（田中1978）。以上の認識に立った上で、各様式の年代的位置づけや併行関係を明らかにするために、外来系遺物などをもとに、隣接する周辺地域の土器編年を用いた交差年代測定法によって相対年代を検討する。

4. 分析

(1) 甕の分類

甕の口径をヒストグラムで示したものが図2である。これをみると100mm～500mmまで幅広い大きさの甕があり、中でも口径20cm～35cmの甕は全体の約6割を占める。ここでは口径10cmから20cm未満の甕を小型甕、20cmから35cm未満の甕を中型甕、35cmを超える甕を大型甕と位置づけ、最も出土量が多く、編年の基準と設定しやすい中型甕を分析対象とする。

中村直子によって、九州南部における弥生時代後期の甕は、薩摩半島西岸域に分布の中心を持つ黒髪式系統と、大隅半島に分布の中心をもつ山ノ口式系統に分かれることが指摘されており、これらの様式差が解消されるのが、次段階の中津野式である（中村1987, 1993）。そのため、本論でも両者の様式差を念頭に置きながら分析を進める。取り上げる甕の属性は「口縁部形態」、「脚部形態」、「突帯形態」である。

また、詳細は後述するが、成川式土器の終焉を検討するためには、外来系土器の要素を取り込んだ折衷甕の検討が必要不可欠である。そのため、在来系土器の変遷と合わせて折衷甕の分析も行う。

成川式土器の分類と編年

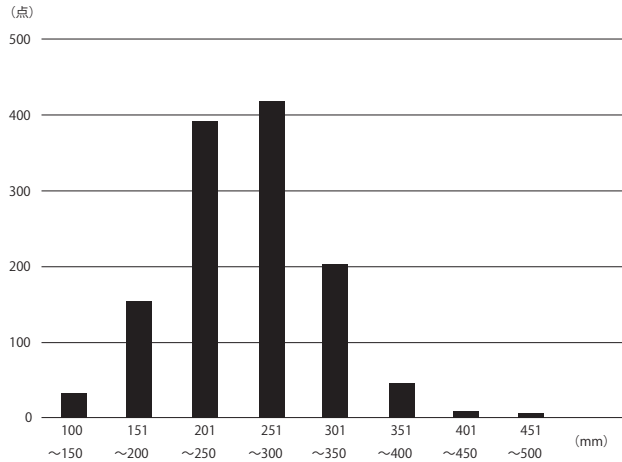


図2 甕の口径ヒストグラム

①各属性の分類

口縁部形態 (図4)

成川式土器の口縁部形態は、くの字に屈曲する口縁部を起点として、徐々にその屈曲度が弱まり、直口→内湾へと変化することがこれまでの編年案でも示されてきた(中村1987)。そこで、口縁部形態の分類を行う前に、頸部と口唇部を結ぶ頸部角度を計測し、資料を分類する際の目安を設定した(表1)。計測については頸部と口唇部を直線で結んだ角度を計測するが(図3)、口縁部が先細りになる口縁部形態a類～d類については、口縁部の中心を通る角度を計測する。

- a類：頸部がくの字に屈曲するもので、内面には強い稜線をもつ。口唇部は丁寧な横ナデが施され、断面形はM字にくぼむ。口縁部はつけ根から先端にかけて先細りになる。頸部角度は20°～35°を中心とする。
- b類：頸部がくの字に屈曲するもので、内面に強い稜線をもつ。口唇部は断面コの字を呈する。口縁部はつけ根から先端にかけて先細りになる。頸部角度は35°～55°を中心とする。
- c類：頸部がくの字に屈曲し、屈曲部内面は突出するため、強い稜線をもつ。口唇部は丸く、

表1 口縁部形態と頸部角度の関係

		頸部角度																		
		20°	25°	30°	35°	40°	45°	50°	55°	60°	65°	70°	75°	80°	85°	90°	95°	100°	105°	110°
口縁部形態	a	3	6	3	3		1	1												
	b		1	1	2	1	2	2	3		1									
	c						1	1	2	2										
	d		1		4	3	10	8	4	4	4		1							
	e		2	1	7	27	31	53	61	59	45	13								
	f			1	3	6	12	24	28	51	45	18	2							
	g								4	16	29	17	16	1	1					
	h							1	1	7	18	17	23	9	9	1				
	i						1	2	10	26	52	54	45	25	25					
	j								2	8	29	21	14	5	5					
	k										2	8	22	27	26					
	l									1	10	22	40	31	31					
	m												8	40	40		47	3		
	n															49	65	44	11	6

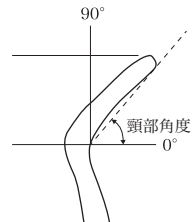


図3 頸部角度

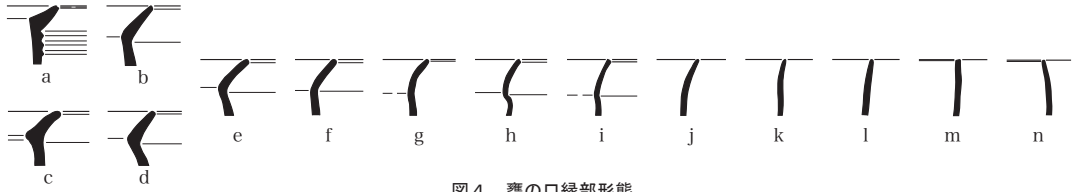


図4 甕の口縁部形態

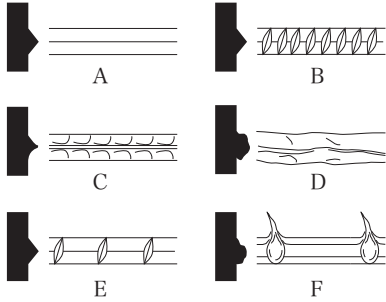


図5 甕の突帯形態

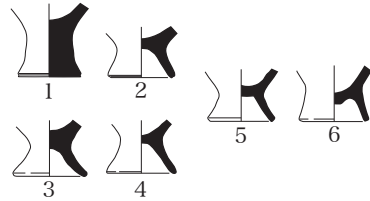


図6 甕の脚部形態

表2 口縁部形態と脚部形態

		脚部形態					
		1	2	3	4	5	6
口縁部形態	a	1					
	b		1				
	c			3			
	d			4	1		
	e			29	24	4	
	f			29	24	8	2
	g			4	12	9	
	h			4	13	3	1
	i			5	20	13	2
	j				2	7	3
	k				1	2	4
	l				1	8	4
	m				2	11	13
	n				2	6	10

表3 口縁部形態と突帯形態

		突帯形態						
		X	A	B	C	D	E	F
口縁部形態	a	1	14					
	b	11	2					
	c	6						
	d	39						
	e	243	3	1				
	f	178	3	11				
	g	69	2	11	1			
	h	61	7	14	4			
	i	169	16	56	6			
	j	30	7	41	5	2		
	k	17	4	41	6	6		
	l	25	3	46	35	13		4
	m	15	2	62	97	15	18	18
	n	8	1	75	97	17	12	15

口縁部はつけ根から先端にかけて先細りになる。頸部角度は $40^{\circ} \sim 55^{\circ}$ を中心とする。
 d類：くの字に屈曲する頸部を持ち、c類に比べると屈曲は弱く、内面の突出はない。口唇部は丸く、口縁部はつけ根から先端にかけて先細りになる。頸部角度は $35^{\circ} \sim 65^{\circ}$ を中心とする。
 e類：くの字に屈曲する頸部を持ち、内面に稜線がみられる。口唇部は丸く、口縁部はつけ根から先端まで同じ厚みでのびる。口縁部は丁寧なヨコナデで調整される。頸部角度は $35^{\circ} \sim 70^{\circ}$ を中心とする。

- f類：頸部がくの字に屈曲するが，e類に比べて屈曲が弱く，胴部も張らない。口唇部は丸く，口縁部はつけ根から先端まで厚みが同じである。口縁部は丁寧なヨコナデ調整される。頸部角度は $35^{\circ} \sim 70^{\circ}$ を中心とする。
- g類：頸部は屈曲するがさらに屈曲度が弱くなる。そのため内面の稜線も弱い。口縁部のヨコナデは弱くなる。頸部角度は $55^{\circ} \sim 75^{\circ}$ を中心とする。
- h類：口縁部外面を縦方向の工具ナデで調整するようになることから，胴部が張り，頸部には工具を当てた際の段が形成される。頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり，口縁端部はコの字になる。頸部角度は $60^{\circ} \sim 85^{\circ}$ を中心とする。
- i類：頸部の屈曲は弱くなり，胴部最大径と頸部径はほぼ同じである。口縁部は直線的に立ち上がり，口唇部は断面コの字になる。頸部角度は $55^{\circ} \sim 85^{\circ}$ を中心とする。
- j類：頸部の屈曲はなくなり，ゆるやかに外反しながら立ち上がる。内面には稜線はみられない。頸部角度は $60^{\circ} \sim 85^{\circ}$ を中心とする。
- k類：胴部から直線的に立ち上がり，口縁部近くでわずかに外反する。頸部角度は $70^{\circ} \sim 85^{\circ}$ を中心とする。
- l類：胴部から口縁部まで直線的に立ち上がり，大きくバケツ形に開くもの。頸部角度は $65^{\circ} \sim 85^{\circ}$ を中心とする。
- m類：内湾気味に直口するもの。口唇部は断面コの字になるものが多い。頸部角度は $75^{\circ} \sim 90^{\circ}$ を中心とする。
- n類：内湾するもの。頸部角度は $90^{\circ} \sim 105^{\circ}$ を中心とする。

突帯形態（図5）

- A類：断面三角突帯。突帯貼付け後に突帯の上下端部に丁寧なヨコナデがみられる。
- B類：突帯貼付け後に刻目が施されるもの。
- C類：突帯を指で摘みながら貼り付けを行ったもの。貼付け後のヨコナデなどは見られない。指頭が連続している状態から絡縄突帯と呼ばれるもの。
- D類：突帯貼り付け時の連続した指頭圧痕などが明瞭に見られないもの。突帯はゆがみながら貼り付けられているものが多く，断面形態は不整形になる。
- E類：突帯貼り付け後の刻目の間隔がまばらになるもの。
- F類：突帯貼り付け後の刻目の間隔がまばらで，主に指頭による刻目を下方から上方へすり上げるように施すもの。
- X類：無文のもの。

脚部形態（図6）

甕の脚部は大きさや形態によって多様性があることが知られており，先行研究では，成川式土器様式圏の縁辺部である熊本南部や北薩，都城盆地などにおいては，低い脚台や上げ底状の底部を有することが指摘されている（甲斐2015b）。本論においても，上記の指摘を受け，脚台高によって分類することが望ましいが，本論では脚部高の計測値を用いて明確に分類することができなかった。この点は，今後の課題としたい。

- 1類：中実脚台。端部はM字にくぼむ。
- 2類：脚部内面が中空となり，脚部が直線的に開くもの。脚端部はM字にくぼむ。
- 3類：脚部が大きくハの字に開くもの。脚端部は丸みを帯びる。脚部内面の天井部はドーム型を呈する。
- 4類：脚部が直線的に開くもの。脚端部は丸みを帯びる。脚部内面の天井部はドーム型を呈する。
- 5類：脚部は直線的に開き，脚部内面の天井部が平坦なもの。
- 6類：脚部は直線的に開き，脚部内面の天井部が下方に突出するもの。

②各属性の相関関係

【口縁部形態と脚部形態の関係（表2）】

口縁部形態と脚部形態の相関関係を確認できた。脚部形態1・2類がいわゆる高付式，脚部形態3・4類が松木菌式であり，口縁部形態と相関する。口縁部形態e類以降，脚部はハの字に開くものを起点としながら，徐々に直線的に開くものになり，脚内部の形態もドーム状の天井形態から平たい天井形態，下方へ突出した天井形態へ変化していることがわかる。

【口縁部形態と突帯形態の関係（表3）】

口縁部形態と突帯形態の相関関係を示したものが表3である。口縁部形態a類は突帯形態A類との組み合わせが最も多く，口縁部形態b類は無文のX類が多い。口縁部形態c・d類は無文のX類との組み合わせだけである。突帯のバリエーションが増えるのは口縁部形態e類からであり，当初は突帯貼付け後に丁寧なヨコナデを施す断面三角突帯のA類が多く見られるが，口縁部形態i類以降，刻目突帯のB類や絡縄突帯のC類が増加する傾向にある。また口縁部が直口から内湾する形態である口縁部形態1類～n類にかけて絡縄突帯のC類，不整形突帯のD類，刻目突帯の刻目がまばらになるE・F類が増加する。

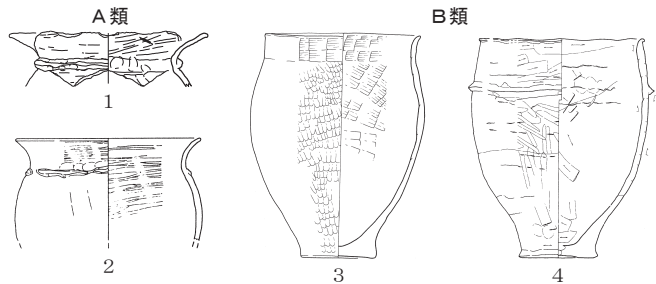
③型式分類（図38～40）

- 甕1類：口縁部形態a類と脚部形態1類が組み合わさるもので，突帯形態はA類の断面三角突帯が複数条巡るもの。
- 甕2類：口縁部形態b類と脚部形態2類が組み合わさるもので，突帯形態は無文のものが多いが，少数ながらA類の断面三角突帯が巡るものもある。
- 甕3類：口縁部形態c類と脚部形態3類が組み合わさるもので，無文のもの。
- 甕4類：口縁部形態d類と脚部形態3類や少量ながら脚部形態4類が組み合わさるもので，無文のもの。
- 甕5類：口縁部形態e類と脚部形態3・4類が組み合わさるもの。突帯を持たないものがほとんどだが，少量ながら突帯形態A類やB類と組み合わさるものがある。
- 甕6類：口縁部形態f類と脚部形態3・4類が組み合わさるもので，数は少ないが脚部形態5類や6類と組み合わさる場合もある。突帯を持たないものがほとんどだが，少量ながら突帯形態A類やB類と組み合わさるものがある。

- 甕7類：口縁部形態g類と脚部形態4・5類が組み合わさるもので、脚部形態3・5類との組み合わせも見られる。突帯を持たないものがほとんどだが、少量ながら突帯形態A類やB類、C類と組み合わさるものがある。
- 甕8類：口縁部形態h類と脚部形態4類と組み合わさるもので、数は少ないが脚部形態3・5・6類との組み合わせも見られる。突帯を持たないものがほとんどだが、少量ながら突帯形態A類やB類、C類と組み合わさるものがある。
- 甕9類：口縁部形態i類と脚部形態4・5類が組み合わさるもので、数は少ないが脚部形態3・6類と組み合わさる場合もある。突帯を持たないものが約3分の2、突帯を有するものが約3分の1を占めるようになり、なかでも突帯形態B類が多い。
- 甕10類：口縁部形態j類と脚部形態5類が組み合わさるもので、数は少ないが脚部形態4・6類との組み合わせも見られる。突帯をもつものが無文のX類よりも多くなり、突帯形態A・B・C・Dがみられ、そのバリエーションも増加する。
- 甕11類：口縁部形態k類と脚部形態6類と組み合わさるもので、数は少ないが脚部形態4・5類との組み合わせも見られる。突帯形態はB類との組み合わせが最も多く、数は少ないが突帯形態A・C・D類、無文のX類も確認できる。
- 甕12類：口縁部形態l類と脚部形態5類と組み合わさるもので、数は少ないが脚部形態4・6類との組み合わせも見られる。突帯形態B・C類が増加するが、依然として無文のX類も多い。
- 甕13類：口縁部形態m類と脚部形態5・6類と組み合わさるもので、数は少ないが脚部形態4類との組み合わせも見られる。突帯については突帯形態A類が減少し、B・C類の組み合わせが増加する。特に突帯形態C類との組み合わせが多い。
- 甕14類：口縁部形態n類と脚部形態6類と組み合わさるもので、数は少ないが脚部形態4・5類とも組み合わさる。突帯形態B・C類との組み合わせが多い。
- 甕15類：口縁部形態l・m・nのうち、数は少ないが突帯の刻目の間隔がまばらになる突帯形態E類と組み合わさるもの。
- 甕16類：口縁部形態l・m・nのうち、数は少ないが突帯を指頭によってすりあげるようにして貼り付ける突帯形態F類と組み合わさるもの。

(2) 折衷甕の分類

ここで取り上げる折衷甕とは、笹貫式新段階の甕と隣接地域の土師器甕の折衷品のことである²⁾。笹貫式新段階の甕は基本的に内湾する口縁部形態で、口縁部付近には突帯を有し、底部は脚台をもつものだが、土師器甕は、くの字もしくはゆるやかに外反する口縁部形態のものが一般的で、無文で丸



1：敷領遺跡 2：橋牟礼川遺跡 3・4：安良遺跡

図7 折衷甕の諸例

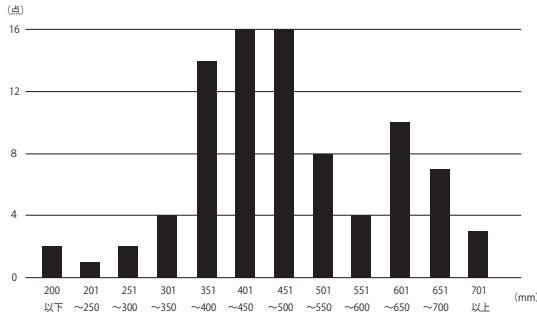


図8 壺 Ya 系統の器高ヒストグラム

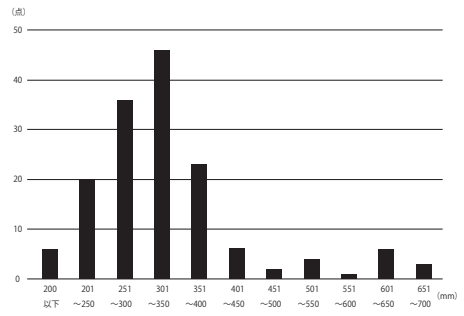


図9 壺 K 系統の器高ヒストグラム

底・平底である。下山覚が指摘した折衷甕は、屈曲する口縁部をもつもので、頸部外面には突帯が巡る（下山1995）。筆者も、敷領遺跡から出土した折衷甕について検討したことがあるが、形態的特徴だけでなく、内面ヘラケズリといった技法的特徴も模倣していることを明らかにした（松崎2014）。

最近では、志布志湾沿岸地域でも7世紀代に位置づけられる折衷甕がいくつか確認されている。当地域の折衷甕は頸部の屈曲が弱く、口唇部近くでわずかに外反するタイプのもので、底部はくびれた平底ないし上げ底を持つ。その形態的特徴から、宮崎平野部の土師器甕の影響を受けていると考えられる。口縁部周辺には突帯を有するもの、無文のものに分けられる。

以上の点から、笹貫式段階の折衷甕はくの字に屈曲する口縁部をもつ「折衷甕A類」、ゆるやかに口縁部が外反する「折衷甕B類」の2つのタイプに分類することができる。

(3) 壺の分類

壺は大きく2つの系統が存在する。ひとつは大隅半島を中心に分布し、多条突帯を有する山ノ口式の系統（以下Y系統）、もう一つは薩摩半島西岸を中心に分布する一条突帯あるいは無文の黒髪式の系統（以下K系統）である。さらにY系統については、口縁部が二叉状を呈し、多条突帯を有する壺（図38-7）を起点とするYa系統、口縁部がへの字口縁で、胴部が球胴状になるもの（図38-9）を起点とするYb系統に分類することができる。

壺はサイズによっても様々な形態や装飾があるため、器高をもとにしたヒストグラムを作成した。これによると、Ya系統は大きく3つに分類でき、本論では器高20cm以下を小型壺、器高20cmから35cmを中型壺、器高35cmから60cmを大型壺、器高60cm以上を超大型壺に位置づける（図8）。この中で資料数が最も多い大型壺を編年の対象とする。

壺K系統は器高20cm以下を小形壺、器高20cm～40cmを中型壺、器高40cm以上を大型壺に位置づける（図9）。この中で最も資料数の多い中型壺を編年の対象とする。なお、Yb系統については資料数が少なく、全体形を知り得る資料が少ないため、今回はサイズによる分類は行わなかった。

(3-1) 壺 Ya 系統

①各属性の分類

口縁部形態（図10）

- a類：口縁部は頸部から大きく外反し，口縁端部が二叉状になるもの。頸部の屈曲は強い。
- b類：口縁部が大きく外反し，口唇部がM字にくぼむもの。
- c類：頸部の屈曲がやや弱まる。頸部はゆるやかに外反し，口唇部はコの字になる。
- d類：頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり，ラッパ状に開くもの。口唇部は丸みをおびる。
- e類：頸部から口縁部にかけて内傾しながら立ち上がり，口縁部先端が屈曲するもの。
- f類：頸部がくの字に屈曲して，口縁部が直線的にのびるもの。
- g類：口縁部が直口するもの。

突帯形態 (図11)

壺 Ya 系統の突帯は大きく 2 つに分けられる。ひとつは断面三角形の突帯を複数条巡らせる「多条突帯」とよばれるもの (A 類)。もうひとつはいわゆる「幅広突帯」と呼ばれる幅の広い粘土帯を貼り付けたもの (B 類) である。先行研究から，多条突帯が形骸化していき，最終的

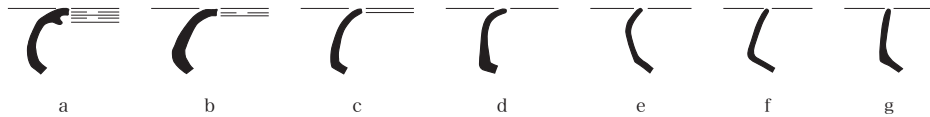


図 10 壺 Ya 系統の口縁部形態

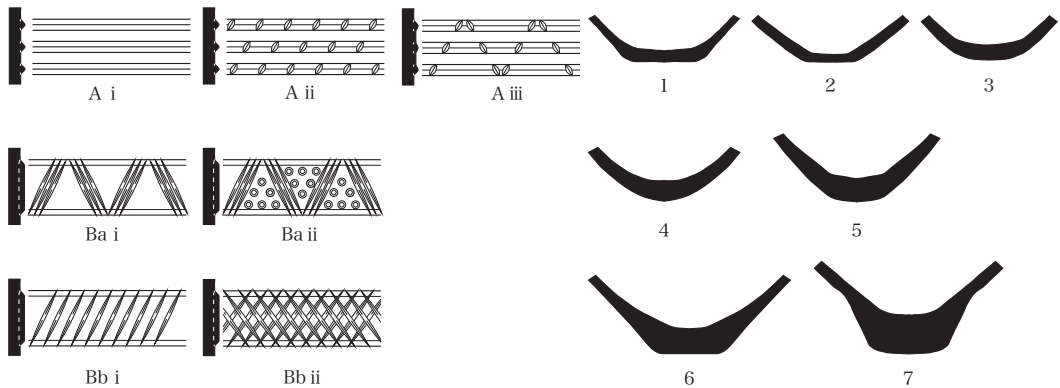


図 11 壺 Ya 系統の突帯形態

図 12 壺 Ya 系統の底部形態

表 4 壺 Ya 系統の口縁部形態と突帯形態の関係

		突帯形態							
		X	A i	A ii	A iii	Ba i	Ba ii	Bb i	Bb ii
口縁部形態	a		1						
	b	2	7						
	c	2	6	5					
	d	3	21	15	2	2	1	1	
	e	4	5	8		3	1		1
	f	1		3	1	9	3	1	1
	g	3		3	1	12	6	4	2

表 5 壺 Ya 系統の口縁部形態と底部形態の関係

		底部形態						
		1	2	3	4	5	6	7
口縁部形態	a	1						
	b	1	2	4	1			
	c			3	6	3	1	
	d				32	6	2	1
	e				7	6	6	
	f				2	6	5	3
	g				2	2	2	5

には粘土帯をそのまま貼り付け、その表面に装飾を施す幅広突帯へ変化することが想定されてきた(中村1987)。そこで本論でも先行研究に則って分類を行うが、幅広突帯は鋸歯状の刻み目を基調とするものをB a類、斜線文を基調とするものをB b類に細分した。

A i類：断面三角形を呈する突帯が複数施されたもの。

A ii類：多条突帯に平行した連続した刻目が施されたもの。

A iii類：多条突帯に鋸歯状の刻み目が施されたもの。

B a i類：幅の広い粘土帯を貼り付け、複数の沈線による鋸歯状の刻み目が施されたもの。

B a ii類：複数の沈線による鋸歯状刻み目の中に竹管文や半裁竹管文が施されたもの。

B b i類：幅の広い粘土帯を貼り付け、沈線が斜めに連続して刻まれたもの。

B b ii類：幅の広い粘土帯を貼り付け、沈線が斜格子状に連続して刻まれたもの。

X類：無文のもの。

底部形態(図12)

1類：底径が5 cm以上あるもので平底のもの。

2類：底径が2 cmほどで平底のもの。

3類：底面がレンズ状のもの。

4類：丸底で底部の器壁の厚さが均一なもの。

5類：丸底で底部の器壁が厚いもの。

6類：底端部が丸みをおびる平底で、底部の器壁が厚いもの。

7類：底部の器壁がさらに厚くなり突出したもの。

②各属性の相関関係

【口縁部形態と突帯形態の関係(表4)】

ゆるやかな相関関係が確認できる。口縁部形態a～c類までは多条突帯の突帯形態A類のみがみられるが、口縁部形態d類以降は幅広突帯である突帯形態B類も出現する。口縁部形態g類段階では突帯形態B類の方が多くなる。

【口縁部形態と底部形態の関係(表5)】

ゆるやかな相関関係が確認できる。底径の大きな平底の底部形態1類から徐々にその径が縮小していき、口縁部形態c類の段階で丸底のものが増加する。丸底化した後は、底部の厚みが徐々に厚くなり、分厚い略平底状を呈し、口縁部形態g類の段階では底部が突出した形となる。

③型式分類(図38～40)

壺Ya 1類：口縁部形態a類と底部形態1類が組み合わさるもので、突帯形態はA i類となるもの。

壺Ya 2類：口縁部形態b類と底部形態3類が組み合わさるもので、数は少ないが底部形態1・2・4類との組み合わせも見られる。突帯は突帯形態A i類が多いが、無文のX類もみられる。

壺Ya 3類：口縁部形態c類と底部形態4類が組み合わさるもので、数は少ないが底部形態3・

5・6類との組み合わせも見られる。突帯は突帯形態A i・A ii類が多いが、無文のものもある。

壺 Ya 4 類：口縁部形態 d 類と底部形態 4 類と組み合わせるもので、数は少ないが底部形態 5・6・7 類との組み合わせも見られる。突帯は突帯形態 A i・A ii 類との組み合わせが多いが、A iii 類や幅広突帯である Ba i・ii・Bb i 類などとの組み合わせも見られ、バリエーションが増加する。無文のものもある。

壺 Ya 5 類：口縁部形態 e 類と底部形態 4・5・6 類と組み合わせるもの。突帯は突帯形態 A i・A ii 類との組み合わせが多く、Ba i・ii 類、B b ii 類、無文の X 類もみられる。

壺 Ya 6 類：口縁部形態 f 類と底部形態 5・6 類と組み合わせるもので、数は少ないが底部形態 4 類や 7 類との組み合わせも見られる。突帯は突帯形態 Ba i 類との組み合わせが多く、多条突帯よりも幅広突帯の割合が高くなる。

壺 Ya 7 類：口縁部形態 g 類と底部形態 7 類と組み合わせるもので、数は少ないが底部形態 4・5・6 類との組み合わせも見られる。突帯は突帯形態 Ba i 類との組み合わせが多く見られ、多条突帯の突帯形態 A 類よりも幅広突帯である突帯形態 B 類が多くなる。

(3-2) 壺 Yb 系統

①各属性の分類

口縁部形態 (図13)

- a 類：口唇部がへへの字に折れ曲がり、内面に突出部をもつもの。
- b 類：口唇部が断面三角形を呈するもの。
- c 類：口唇部が断面コの字を呈するもの。
- d 類：頸部がくの字に屈曲し、口縁部が直線的にのびるもの。
- e 類：頸部がくの字に屈曲し、口縁部がラッパ状に大きく開くもの。

底部形態 (図14)

- 1 類：小さな平底をもつもの。
- 2 類：レンズ状の底部をもつもの。
- 3 類：丸底のもの。

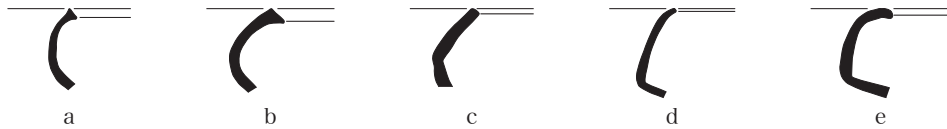


図 13 壺 Yb 系統の口縁部形態



図 14 壺 Yb 系統の底部形態

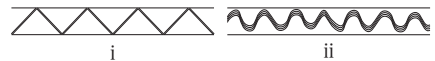


図 15 壺 Yb 系統の口唇部文様

表6 壺 Yb 系統の口縁部形態と底部形態

		底部形態		
		1	2	3
口縁部形態	a	1		
	b	1		
	c			
	d	1	2	1
	e		2	2

表7 壺 Yb 系統の口縁部形態と口唇部文様

		口唇部文様		
		i	ii	X
口縁部形態	a	2	6	3
	b	3	6	
	c		1	2
	d			5
	e			4

口唇部文様 (図15)

- i 類：沈線による鋸歯文。
- ii 類：櫛描波状文。
- X 類：無文。

②各属性の相関関係

【口縁部形態と底部形態の関係 (表6)】

資料数が少なく明確な相関関係は確認することができなかったが、口縁部形態 d 類から底部形態 2・3 類との組み合わせが見られるようになり、徐々に丸底化することが想定できる。

【口縁部形態と口唇部文様の関係 (表7)】

明確な相関関係を見出すことはできなかった。口縁部形態 a・b 類段階までは、文様が施される口唇部文様 i・ii 類との組み合わせが多い。また、口縁部形態 c 類以降は無文化することがわかった。

③型式分類 (図38~40)

- 壺 Yb 1 類：口縁部形態 a 類と底部形態 1 類が組み合わさるもの。口唇部文様は ii 類が多いが、i 類や無文の X 類もみられる。
- 壺 Yb 2 類：口縁部形態 b 類と底部形態 1 類が組み合わさるもの。口唇部文様は ii 類が多く、数は少ないが i 類もみられる。
- 壺 Yb 3 類：口縁部形態 c 類と底部形態の組み合わせは資料がないため不明である³⁾。口唇部文様は無文の X 類が多い。
- 壺 Yb 4 類：口縁部形態 d 類と底部形態 2 類が組み合わさるもので、底部形態 1・3 類との組み合わせも見られる。口唇部文様は無文の X 類のみである。
- 壺 Yb 5 類：口縁部形態 e 類と底部形態 2・3 類が組み合わさるもの。口唇部文様は無文の X 類のみである。

(3-3) 壺 K 系統

①各属性の分類

口縁部形態 (図16)

- a類：頸部がくの字に屈曲し，口縁部がラッパ状に開くもの。口唇部はM字にくぼむ。
- b類：口縁部が外反するもので，口唇部はコの字になる。
- c類：頸部から口縁部にかけて直線的に開くもの。
- d類：口縁部が立ち上がり，上方に開くもの。
- e類：口縁部が上方に直線的に立ち上がるもの。口縁部は短くなる。
- f類：口縁部が内傾しながら立ち上がるもの。

底部形態（図17）

- 1類：平底で底径が5～7 cmほどのもの。
- 2類：平底で底径が3 cmほどのもの。
- 3類：レンズ底。
- 4類：底面がほとんどなく，尖底気味のもの。
- 5類：丸底のもの。
- 6類：底部の端部が丸みをおび，底面の厚さが分厚くなったもの。

突帯の形状（図18）

- i類：突帯に刻目が施されるもの。
- ii類：突帯に刻目が施されないもの。
- X類：無文のもの。

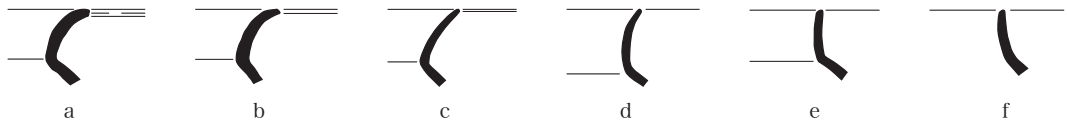


図16 壺K系統の口縁部形態

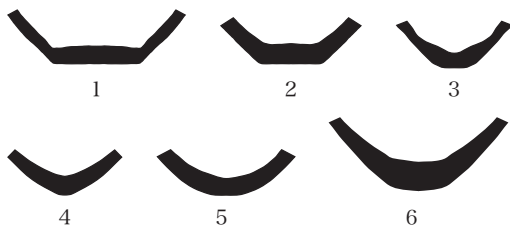


図17 壺K系統の底部形態

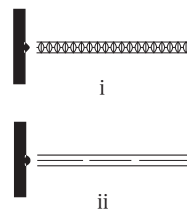


図18 壺K系統の突帯形態

表8 壺K系統の口縁部形態と底部形態

		底部形態					
		1	2	3	4	5	6
口縁部形態	a	9	11	4			
	b	1	30	24	3	8	
	c		13	20	15	30	2
	d		5	12	7	37	8
	e			1	1	16	5
	f					2	2

表9 壺K系統の口縁部形態と突帯形態

		突帯形態		
		i	ii	X
口縁部形態	a	20	4	6
	b	41	6	21
	c	57	18	25
	d	42	6	45
	e	7		25
	f			4

②各属性の相関関係

【口縁部形態と底部形態の関係（表8）】

相関関係を確認できた。基本的には平底のものを起点としながら、Y類壺と同様、口縁部が立ち上がるにつれて、徐々にその底面積を縮小させながら丸底化していく。最終的には、底部の分厚い丸底を呈するようになる。

【口縁部形態と突帯形態の関係（表9）】

口縁部形態 a 類では基本的に突帯に刻目を施した突帯形態 i 類が一般的だが、その後、数は少ないながらも刻みを施さない突帯形態 ii 類もみられるようになる。また、口縁部形態 b 類から無文の壺も増加傾向を示し、口縁部形態 d・e 類では無文壺の方が多くなる。最終的に口縁部形態 f 類の段階ですべて無文化する。

③型式分類（図38～40）

壺 K 1 類：口縁部形態 a 類と底部形態 1・2 類が組み合わさるもので、数は少ないが底部形態 3 類との組み合わせも見られる。突帯は突帯形態 i 類との組み合わせが多く、ii 類や無文の X 類もみられる。

壺 K 2 類：口縁部形態 b 類と底部形態 2・3 類が組み合わさるもので、数は少ないが底部形態 4・5 類との組み合わせも見られる。突帯は突帯形態 i 類のものが多く、無文の X 類は i 類の半分程度の割合である。

壺 K 3 類：口縁部形態 c 類と底部形態 2～5 類が組み合わさるもので、数は少ないが底部形態 6 類との組み合わせも見られる。突帯は突帯形態 i 類が多く、無文の X 類は i 類の半分程度の割合である。

壺 K 4 類：口縁部形態 d 類と底部形態 5 類が組み合わさるもので、数は少ないが底部形態 2・3・4・6 類との組み合わせも見られる。突帯は突帯形態 i 類と無文の X 類がほぼ同じ割合で存在する。

壺 K 5 類：口縁部形態 e 類と底部形態 5 類が組み合わさるもので、数は少ないが底部形態 6 類との組み合わせも見られる。突帯は突帯形態 ii 類が見られなくなり、i 類についてもその数が減る。逆に無文の X 類が多くなる。

壺 K 6 類：口縁部形態 f 類と底部形態 5・6 類が組み合わさるもの。突帯形態は無文の X 類のみになる。

(4) 高杯

弥生時代の九州南部における高杯は一般的な器種ではなく、弥生時代終末から古墳時代に増加する器種である（中村2000）。近年では資料数が増加したこともあり、複数系統の型式変化を捉えることが可能となった。

1つ目に杯部が大きく外反する大型高杯（A系統）、2つ目に杯部に段を有し、椀型の形態を呈する高杯（B系統）、3つ目に杯部が深く、ゆるやかに屈曲する高杯（C系統）、4つ目に口縁部近くで内傾しながら屈曲する高杯（D系統）、5つめに小型で杯部が強く外反する高杯

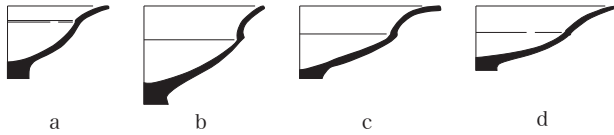


図19 高杯A系統の杯部形態

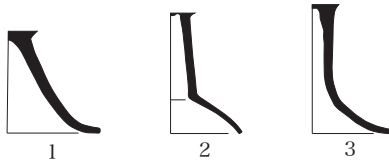


図20 高杯A系統の脚部形態

表10 高杯A系統の杯部形態と脚部形態

		脚部形態		
		1	2	3
杯部 形態	a	3		
	b	1		
	c		2	1
	d		2	2

(E系統), 6つ目に杯部外面に瘤状の突起や杯部内面に把手を有する高杯(F系統)である。とりあげる属性としては杯部形態と脚部形態に主に着目するが, 丹塗が施される資料については丹塗の有無なども分類の対象属性としてあげる。

(4-1) 高杯A系統

①各属性の分類

杯部形態 (図19)

- a類: 杯部の屈曲点は口縁部近くに位置し, 屈曲部内面には段が形成されるもの。
- b類: 杯部の屈曲が強く, 外面に強い稜線をもつもの。
- c類: 杯部の屈曲部から上方が大きく外反しながら開くもの。
- d類: 杯部の屈曲がほとんどなく, ゆるやかに開くもの。

脚部形態 (図20)

- 1類: スカート状に直線的に開くもの。
- 2類: 脚部の途中から大きくふくらみ, 裾部にかけて袋状に開くもの。
- 3類: 筒部は直線的で端部に向かって大きく外反しながら開くもの。

②属性の相関関係

【杯部形態と脚部形態の関係 (表10)】

相関関係表を見たところ, 資料数が少ないため, 明確な相関関係を確認することができなかった。そこで本論では, 杯部形態を基軸に分類を行いたい。

③型式分類 (図38~40)

- 高杯A 1類: 杯部形態 a類と脚部形態 1類が組み合わさるもの。
- 高杯A 2類: 杯部形態 b類と脚部形態 1類が組み合わさるもの。
- 高杯A 3類: 杯部形態 c類と脚部形態 2類が組み合わさるもので, 数は少ないが脚部形態 3類とも組み合わさる。
- 高杯A 4類: 杯部形態 d類と脚部形態 2・3類が組み合わさるもの

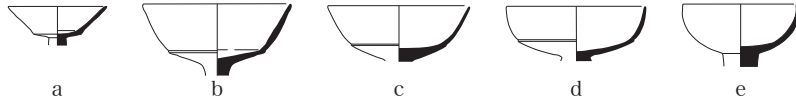


図 21 高杯B系統の杯部形態

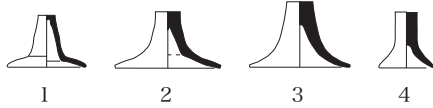


図 22 高杯B系統の脚部形態

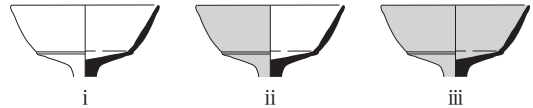


図 23 高杯B系統の丹塗範囲

表 11 高杯B系統の杯部形態と脚部形態

		脚部形態			
		1	2	3	4
杯部形態	a	2			
	b		4	8	1
	c		4	11	1
	d		1	12	1
	e			2	6

表 12 高杯B系統の杯部形態と丹塗範囲

		丹塗範囲		
		i	ii	iii
杯部形態	a	4		
	b	3	9	5
	c	30	23	6
	d	16	22	13
	e	5	6	6

(4-2) 高杯B系統

①各属性の分類

杯部形態 (図21)

- a類：杯部の屈曲が強く、斜め上方に直線的に開くもの。
- b類：屈曲部から口縁部にかけて直線的にのびるもの。杯部は箱型を呈する。
- c類：杯部が丸みをおび、口縁部が直線的に立ち上がるもの。
- d類：杯部が内湾するもの。
- e類：杯部の段がなくなり、椀形を呈するもの。

脚部形態 (図22)

- 1類：筒部は直線的で、脚部が途中から強く屈曲しながら開くもの。
- 2類：脚部が途中から弱く屈曲するもの。脚部内面には稜線が形成される。
- 3類：脚部がゆるやかに開くもの。
- 4類：筒部が中実で短く開くもの。

丹塗範囲 (図23)

- i類：丹塗がないもの。
- ii類：外面のみ丹塗がみられるもの。
- iii類：内外面とも丹塗がみられるもの。

②属性の相関関係

【杯部形態と脚部形態の関係 (表11)】

相関関係を確認することができた。杯部形態 a 類と組み合わせるのは脚部が屈折した脚部形態 1 類のみであり、杯部が深い箱形から椀形へと変化していくにつれて、脚部の屈曲も少しずつ弱くなり、ゆるやかに開く形態へと変化していくことがわかった。最終的には、杯部外面の段も無くなり、杯部が椀形を呈するようになると、充実した脚筒部から短く開く形態になることがわかった。

【杯部形態と丹塗範囲の関係（表12）】

相関関係はみられなかった。杯部形態 a 類には丹塗を施す資料が存在しないが、続く杯部形態 b 類からは外面だけでなく、内面の丹塗を施した資料も出現することが分かり、時間の経過とともに丹塗資料が増え、丹塗の範囲も外面だけでなく、内面に及ぶようになるというわけではないこともわかった。また、丹塗が出現したからと言って、すべての資料が丹塗を施すようになるわけではなく、丹塗が施されない資料も一定数存在していることもわかった。この点については、地域差を含有している可能性もある。

③型式分類（図38～40）

高杯 B 1 類：杯部形態 a 類と脚部形態 1 類が組み合わせるもの。丹塗はみられず、すべてが無塗彩の i 類である。

高杯 B 2 類：杯部形態 b 類と脚部形態 3 類が組み合わせるもので、数は少ないが脚部形態 2・4 類との組み合わせも見られる。丹塗については外面に塗彩される ii 類との組み合わせが多く、数は少ないが無塗彩の i 類や内外面に塗彩される iii 類もみられる。

高杯 B 3 類：杯部形態 c 類と脚部形態 3 類が組み合わせるもので、数は少ないが脚部形態 2・4 類との組み合わせも見られる。丹塗については無塗彩の i 類が最も多く、ii 類もある程度存在する。

高杯 B 4 類：杯部形態 d 類と脚部形態 3 類が組み合わせるもので、数は少ないが脚部形態 2・4 類との組み合わせも見られる。丹塗は、ii 類のものが多く、i 類・iii 類が同じ割合で認められる。

高杯 B 5 類：杯部形態 e 類と脚部形態 4 類が組み合わせるもので、数は少ないが脚部形態 3 類との組み合わせも見られる。丹塗は i～iii 類までほぼ同じ割合で確認できる。

(4-3) 高杯 C 系統

①各属性の分類

杯部形態（図24）

- a 類：杯部の中程で屈曲するもの。口縁部は直線的にのびるもの、ゆるやかに外反するものがある。
- b 類：杯部の屈曲点が低く、稜線も弱くなるもの。口縁部は直線的に開く。
- c 類：杯部の屈曲が弱くなり、体部が丸みをおびるもの。
- d 類：内湾気味に屈曲するもの。

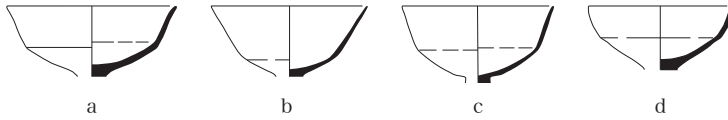


図 24 高杯C系統の杯部形態

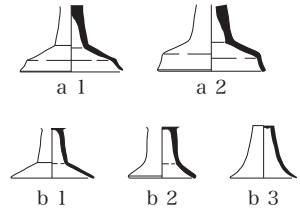


図 25 高杯C系統の脚部形態

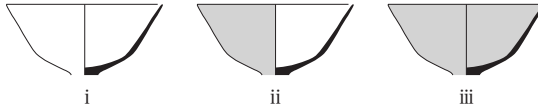


図 26 高杯C系統の丹塗範囲

表 13 高杯C系統の杯部形態と脚部形態

		脚部形態				
		a1	a2	b1	b2	b3
杯部 形態	a	7	4	1		1
	b				5	2
	c					2
	d					2

表 14 高杯C系統の杯部形態と丹塗範囲

		丹塗範囲		
		i	ii	iii
杯部 形態	a	21	2	1
	b	12	5	4
	c	6		
	d	2		

脚部形態（図25）

高杯C系統の脚部は大きく分けて2つの系統がある。ひとつは脚部が袋状に開き，脚端部が折れ曲がるもの（a類），もうひとつは屈曲しながら開くもの（b類）である。

- a 1類：脚屈曲部から直線的に開き，端部はゆるやかに外反するもの。
- a 2類：脚屈曲部からわずかにふくらみを持ちながら開き，端部は内湾気味になるもの。
- b 1類：脚部が強く屈曲して直線的に開くもの。脚内面には強い稜線がみられる。
- b 2類：脚部の屈曲が弱くなり，短く開くもの。
- b 3類：脚部の屈曲がなくなり，杯部との接合部から緩やかに外反して開くもの。

丹塗範囲（図26）

- i類：丹塗がないもの。
- ii類：外面のみ丹塗がみられるもの。
- iii類：内外面とも丹塗がみられるもの。

②属性の相関関係

【杯部形態と脚部形態の関係（表13）】

杯部形態と脚部形態 b類についてはゆるやかな相関関係がみられるが，脚部形態 a類については組み合わせが杯部形態 a類のみであったため，相関関係は認められなかった。

【杯部形態と丹塗範囲（表14）】

相関関係はみられなかった。杯部形態 a・b類の段階では，丹塗が施されないものが多かったが，内外面とも丹塗がみられる資料がある程度確認できる。杯部形態 c・d類以降は丹塗が

施される資料がみられなくなる。そのため、高杯C類については、口縁部形態の変化とあわせて丹塗範囲が広がるのではなく、徐々に丹塗が施される資料が少なくなっていくことがわかった。

③型式分類（図38～40）

高杯 Ca 1 類：杯部形態 a 類と脚部形態 a 1 類が組み合わさるもの。丹塗が施されないものが多いが、数は少ないが丹塗の範囲 ii・iii類もみられる。

高杯 Ca 2 類：杯部形態 a 類と脚部形態 a 2 類が組み合わさるもの。丹塗が施されないものが多いが、数は少ないが丹塗の範囲 ii・iii類もみられる。

高杯 Cb 1 類：杯部形態 a 類と脚部形態 b 1・3類と組み合わさるもの。丹塗が施されないものが多いが、数は少ないが丹塗の範囲 ii・iii類もみられる。

高杯 Cb 2 類：杯部形態 b 類と脚部形態 b 2 類が組み合わさるもので、数は少ないが a 3 類との組み合わせもみられる。丹塗が施されないものが多いが、数は少ないが丹塗の範囲 ii・iii類もみられる。

高杯 Cb 3 類：杯部形態 c 類と脚部形態 b 3 類が組み合わさるもの。丹塗はすべて無塗彩である。

高杯 Cb 4 類：杯部形態 d 類と脚部形態 b 3 類が組み合わさるもの。丹塗はすべて無塗彩である。

(4-4) 高杯D系統

高杯D類は杯部が椀状を呈し、口縁部から内側に屈曲するものである。その形態から須恵器高杯を模倣したものと考えられる。高杯D類については、脚部との関係性が分かる資料が少なく、現段階では杯部形態のみで分類を行う（図27）。

a 類：杯部の屈曲が弱く、丸みをおびて屈曲するもの。

b 類：杯部の屈曲が弱く、外面に稜線が見られるもの。

(4-5) 高杯E系統

高杯E類は口径10cm から15cm ほどの小型高杯で、杯部が大きく外反するタイプである。高杯E類についても脚部との関係性が分かる資料が少なく、現段階では杯部形態のみで分類を行う（図28）。

a 類：比較的深さのある杯部で、杯部の途中から強く屈曲して外反するもの。

b 類：杯部が浅くなり、口縁部が垂下するほど強く屈曲するもの。

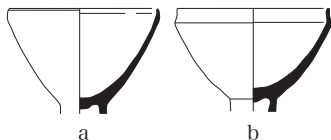


図 27 高杯D系統の杯部形態



図 28 高杯E系統の杯部形態

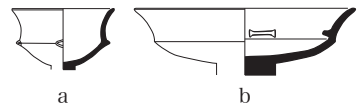


図 29 高杯F系統の杯部形態

(4-6) 高杯F系統

高杯F類は杯部に突起や把手を付加させるタイプのものを指す。外面に瘤状の突起をもつものをa類、内面に把手をもつものをb類として分類する。現在のところ指宿地域のみでみられる高杯の形態である(図29)。

a類：杯部外面に瘤状の突起を有するもの。

b類：杯部内面に把手を有するもの。

(5) 埴の分類

埴は古墳時代に登場する小型丸底壺を祖形として、在地で変容した器種である。とくに、古墳時代後半期に入ると在地変容化が著しく、赤色塗彩が施されたり、口縁部をデフォルメさせたり、須恵器を模倣した製品なども認められる(中村1997・1999)。先行研究では埴には大きく2つの系統があることが指摘されている(甲斐2015a)。一つは布留系の小型丸底壺の影響を受けて成立したと考えられる、胴部と頸部の境界が明瞭で深みのある胴部を有するタイプである。もう一つは瀬戸内海周辺、特に阿波・讃岐地域の弥生時代終末期～古墳時代初頭の小型壺に近似する、口縁部と胴部の境界がわずかな屈曲や段で表現され、器高に比して胴部が浅いタイプである。本論では甲斐が示した系統をもとに、布留系のものをF系統、瀬戸内系のものをS系統と位置づけ、それぞれの変遷過程を検討する。

(5-1) 埴F系統

①各属性の分類

口縁部形態(図30)

a類：直線的に開くもの。

b類：受け口状に内湾するもの。

胴部形態(図31)

A類：胴部が丸みをおびて、胴部最大径と頸部径がほぼ同じもの。

B類：胴部が丸みをおびて張り出し、胴部最大径と口径がほぼ同じもの。

C類：胴部が丸みをおびて張り出し、胴部最大径が口径を大きく超えるもの。

D類：胴部がソロバン玉状に張り出し、肩部が丸みをおびるもの。

E類：胴部がソロバン玉状に張り出し、肩部が直線的に内傾するもの。

F類：胴部がソロバン玉状に張り出し、肩部が内傾しながら反り上がるもの。

底部形態(図32)

1類：丸底のもの。

2類：レンズ状の底部をもつもの。

3類：平底のもの。

4類：上げ底のもの。



図30 埴F系統の口縁部形態

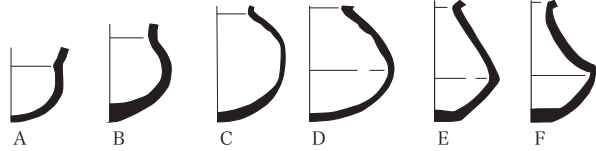


図31 埴F系統の胴部形態



図32 埴F系統の底部形態

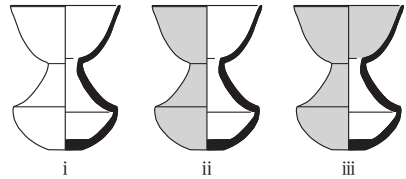


図33 埴F系統の丹塗範囲

表15 埴F系統の口縁部形態と胴部形態

		胴部形態					
		A	B	C	D	E	F
口縁部形態	a	25	32	15	24	2	
	b		3	7	35	25	24

表16 埴F系統の口縁部形態と底部形態

		底部形態			
		1	2	3	4
口縁部形態	a	56	22	11	2
	b	4	18	53	7

表17 埴F系統の口縁部形態と丹塗範囲

		丹塗範囲		
		i	ii	iii
口縁部形態	a	101	4	1
	b	55	27	11

表18 埴F系統の胴部形態と丹塗範囲

		丹塗範囲		
		i	ii	iii
胴部形態	A	25		
	B	34		
	C	19	4	
	D	55	9	4
	E	23	10	4
	F	7	25	6

表19 埴F系統の胴部形態と底部形態

		底部形態			
		1	2	3	4
胴部形態	A	18	1		
	B	24	1	3	
	C	10	5	6	
	D	6	28	26	1
	E	4	12	17	2
	F			21	16

丹塗範囲 (図33)

- A類：丹塗が施されないもの。
- B類：丹塗が外面のみ施されるもの。
- C類：丹塗が外面と口縁部内面まで施されるもの。

②各属性の相関関係

【口縁部形態と胴部形態の関係 (表15)】

相関関係がみつめられる。胴部形態A～C類までは直線的に開く口縁部形態a類が多かったが、胴部形態D類以降、内腕する口縁部形態b類が増加する傾向が読み取れた。

【口縁部形態と底部形態の関係 (表16)】

相関関係がみつめられる。底部形態1類段階では、口縁部形態a類との組み合わせが強いが、

底部形態 2 類段階になると口縁部形態 a・b 類ともほぼ同じ割合となる。底部形態 3 類段階では口縁部形態 b 類が多く組み合わせようになる。底部形態 4 類段階では全体数が少ないながらも口縁部形態 b 類との組み合わせが多いことがわかった。

【口縁部形態と丹塗範囲の関係（表17）】

ゆるやかな相関関係がみられた。口縁部形態 a 類とは無塗彩の丹塗範囲 i 類が多く組み合わせり、口縁部形態 b 類とは丹塗範囲 i・ii 類との組み合わせが多く、iii 類も増加している。そのため、口縁部の変化とともに徐々に丹塗範囲が広がっていく過程を読み取ることができる。

【胴部形態と丹塗範囲の関係（表18）】

ある程度の相関関係が認められた。胴部形態 D 類までは、丹塗が施されない丹塗範囲 i 類との組み合わせが多いが、胴部形態 E 類以降は、丹塗範囲 ii・iii 類が多くなることがわかった。

【胴部形態と底部形態の関係（表19）】

相関関係がみつめられる。胴部が丸みをもつ胴部形態 A～C 類の段階では、底部形態も丸底のものが多いが、胴部形態 D 類や E 類のように胴部の張りが徐々に強くなるに連れて、平底の資料が増加することがわかった。胴部形態 E 類段階になるとすべてが平底もしくは上げ底状を呈するようになる。

③型式分類（図38～40）

坩 F 1 類：口縁部形態 a 類と胴部形態 A 類が組み合わせるもの。底部形態については、口縁部形態 a 類と底部形態 1 類の組み合わせが最も多い。丹塗については無塗彩の i 類のみである。

坩 F 2 類：口縁部形態 a 類と胴部形態 B 類が組み合わせるもの。底部は丸底の 1 類との組み合わせが多いが、2・3 類との組み合わせもわずかにみられる。丹塗は無塗彩の i 類のみである。

坩 F 3 類：口縁部形態 a 類と胴部形態 C 類が組み合わせるもの。底部形態は 1 類との組み合わせが最も多い。丹塗については、無塗彩の丹塗範囲 i 類が最も多く、数は少ないが丹塗範囲 ii 類もみられる。

坩 F 4 類：口縁部形態 a 類と胴部形態 D 類が組み合わせるもの。底部形態 2・3 類との組み合わせが多く、数は少ないが底部形態 1・4 類との組み合わせもみられる。丹塗については、無塗彩の i 類が多いが、内外面に塗彩する丹塗範囲 iii 類も認められるようになる。

坩 F 5 類：口縁部形態 b 類と胴部形態 D 類が組み合わせるもの。底部形態 2・3 類との組み合わせが多く、数は少ないが底部形態 1・4 類との組み合わせもみられる。丹塗については、無塗彩の i 類が多いが、内外面に塗彩する丹塗範囲 iii 類も認められるようになる。

坩 F 6 類：口縁部形態 b 類と胴部形態 E 類が組み合わせるもの。底部形態 3 類との組み合わせ

が最も多い。丹塗については、無塗彩の丹塗範囲 i 類が最も多いが、丹塗範囲 ii 類・iii 類の割合も増加する。

坩 F 7 類：口縁部形態 b 類と胴部形態 F 類が組み合わさるもの。底部形態 3・4 類との組み合わせが見られる。丹塗については、外面に塗彩する ii 類との組み合わせが最も多く見られ、無塗彩の丹塗範囲 i 類、内外面に塗彩する丹塗範囲 iii 類は同じ割合で存在する。

(5-2) 坩 S 系統

①各属性の分類

口縁部形態 (図34)

- 1 類：直線的に開くもの。
- 2 類：外反しながら開くもの。
- 3 類：頸部から緩やかに直口するもの。
- 4 類：頸部から内傾しながら立ち上がるもの。

胴～底部形態 (図35)

- A 類：体部の膨らみがほとんど無く、頸部の屈曲部が外方へ突出し、明瞭な稜線を持つもの。底部は扁平。
- B 類：頸部の屈曲部が外方へ突出し、胴部が膨らみをもつもの。底部は丸底を呈する。
- C 類：体部が深みを増し、全体的に丸みをもつもの。
- D 類：肩部が貼り、最大径となるもの。底部はやや尖底気味の丸底となる。

丹塗範囲 (図36)

- i 類：丹塗のないもの。
- ii 類：外面に丹塗が施されるもの。

②各属性の相関関係

【口縁部形態と胴～底部形態の関係 (表20)】

相関関係がみとめられる。口縁部形態が、外反する形態から徐々に直口、内傾する口縁部形態へ変化すると、胴部形態が少しずつ膨らみを増し、肩部が張る変遷をたどることがわかった。

【口縁部形態と丹塗範囲 (表21)】

相関関係はみられなかった。当初、坩 F 類と同様に口縁部の変化に連れて、丹塗を施すものが増加することを予想したが、坩 S 類は無塗彩のものが圧倒的に多く、丹塗が施される資料自体が少ないことがわかった。

③型式分類 (図38～40)

坩 S 1 類：口縁部形態 a 類と胴～底部形態 A 類が組み合わさるもので、数は少ないが胴～底部

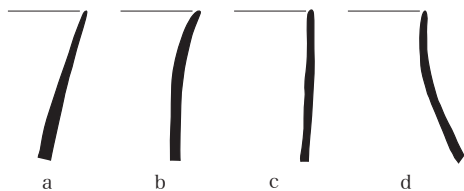


図 34 罎 S 系統の口縁部形態

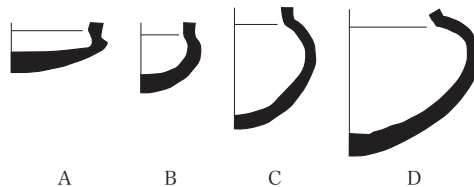


図 35 罎 S 系統の胴～底部形態

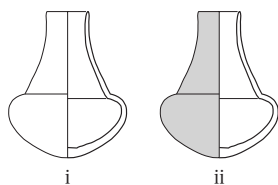


図 36 罎 S 系統の丹塗の範囲

表 20 罎 S 系統の口縁部形態と胴～底部形態

		胴～底部形態			
		A	B	C	D
口縁部形態	a	40	11	1	
	b	5	11	19	
	c	2	5	4	2
	d		1	3	4

表 21 口縁部形態と丹塗の範囲

		丹塗の範囲	
		i	ii
口縁部形態	a	54	
	b	28	3
	c	15	
	d	8	

形態 B・C 類との組み合わせも見られる。丹塗についてはすべて無塗彩の i 類である。

罎 S 2 類：口縁部形態 b 類と胴～底部形態 C 類と組み合わせるもので、数は少ないが胴～底部形態 A・B 類との組み合わせも見られる。丹塗については無塗彩の i 類がほとんどだが、外面塗彩の ii 類もわずかに確認できる。

罎 S 3 類：口縁部形態 c 類と胴～底部形態 B・C 類が組み合わせるもので、数は少ないが胴～底部形態 A・C・D 類との組み合わせも見られる。丹塗は無塗彩の i 類のみである。

罎 S 4 類：口縁部形態 d 類と胴～底部形態 C・D 類が組み合わせるもので、数は少ないが胴～底部形態 B・C 類との組み合わせも見られる。丹塗についてはすべて無塗彩の i 類である。

(6) 甑

甑は、古墳時代中期に朝鮮半島を經由して導入された蒸し調理を行うための調理具である。この蒸し調理という調理方法は、日本列島の人々の食生活に新たな調理技術を加えた点で大きな画期と言え（宇野1999, 亀田2003）、近畿地方の古墳時代集落においては新来の調理様式や土器製作技術の受容過程などについても研究が進展している。

全国的な蒸し調理技術の復元および普及過程について研究が進展するなかで、九州南部では甑と竈の出土が極端に少なく、先行研究では「造り付け竈、移動式竈、甑のいずれもがその受容を拒否される」（杉井2004：p.309）とあるように、基本的に蒸し調理は導入されなかったとする考え方が一般的であった。しかし、近年の発掘調査例からは、甑の出土数が増加しており、旧来の認識を再考する必要がある。加えて、甑の出土量が増加する一方、造り付け竈、移動式竈の検出例は依然として少なく、どのように蒸し調理を行ったかという問題も浮上していた。筆者は、九州南部で出土する甑外面に残るススの観察から、先述した折衷甕の上部に甑を乗せて、炉で使用していることを想定した（松崎2020）。また、九州南部における甑はそのほとんどに甕にみられる突帯をもつものがあることから、煮炊きに使用する土器には突帯をつけると

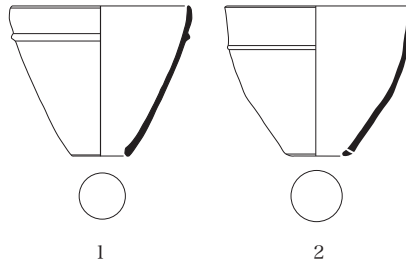


図 37 甑蒸気孔の分類

いう何らかの規範があった可能性を推測し、それらの甑を「九州南部型甑」と名づけた。そこで、本論でも九州南部型甑を取り扱う。九州南部型甑の器形は、ほとんどが筐貫式甕と同様の内湾するバケツ形を呈していることから、杉井健による甑形土器の分類（杉井1994）を参考に蒸気孔の形態で分類する（図37）。

蒸気孔形態

- 1類：つつぬけタイプ
- 2類：棧渡しタイプ（小円孔）

5. 様式設定

次に様式設定を行う。九州南部における古墳時代から古代にかけての調査では、厳密な一括性が担保できるような遺構一括資料はほとんど無く、住居埋土や溝埋土、土器溜まりなどから出土した資料が多い。一括性のレベルにおいては安定しない資料が多く存在するが、ある程度の時間幅を見越した上で様式設定をすることによって、細分化や細密化についての問題は今後解決されることをまちたい。

表22～24は上記土器分類を横軸に、一括性が認められる遺構⁴⁾を縦軸に並べたものである。型式が存在するものは「●」、破片のため可能性があるものは「▲」で示した。この表をもとに、土器分類の組み合わせ関係を基準に様式設定を行った。以下からは各様式の説明に加えて、共伴する外来系遺物をもとに隣接地域における相対編年の比較をおこなう。比較を行う研究としては、弥生時代後期から終末については、河野裕次による編年（河野2011, 2019）、古墳時代前半期については久住猛雄による編年（久住1999）、古墳時代後半期以降については陶邑編年（田辺1981）、大宰府の土器をもとにした中島恒次郎による編年（中島2015）を用いる。

(1) 高付式

甕1～2類、壺Ya1～2類、壺Yb1～3類で構成される。高付遺跡包含層、塚崎遺跡包含層、麦田下遺跡土器溜まり、横瀬遺跡2号住居跡などの出土資料が該当する。甕を基軸にした場合、甕1類の数が多く、甕2類の数が少ないため、甕1類と2類に時間的な隔りがあるか不明である。壺はYb1～3類が麦田下遺跡土器溜まりで共伴している。

高付式の年代を知る手がかりとして、麦田下遺跡土器溜まりから出土した西南四国系土器が知られている。この西南四国系土器は河野裕次による編年（河野2011）の2期にあたり、弥生

時代後期初頭から中葉に位置づけられている（内村2014）。

また、横瀬遺跡2号住居跡からは、V様式系の高杯が出土している。この高杯は宮崎平野南部の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年を提示した河野裕次によって「3型式」に分類されているものと類似しており、弥生時代後期後半に位置づけられている（河野2019）。

以上の点から、高付式は弥生時代後期に位置づけることができるが、後述する中津野式が古墳時代初頭に位置づけられることから、弥生時代終末期までを含んでおきたい⁵⁾。

(2) 松木菌式

甕3～5類、壺Ya1・2類、壺K1～3類で構成される。松木菌遺跡大溝、大島遺跡27号住居が該当する。甕を基軸とした場合、甕3類と甕4類の型式差は時間的な差異も想定できるが、現在のところは同一遺構から出土しているため、時間差があるかどうか判断することができない。今後資料数が増加することによって分離可能になるものと考えられる。

松木菌式の年代を知る手がかりとして、松木菌遺跡溝跡から出土した瀬戸内系土器がある。松木菌遺跡の溝跡からは瀬戸内系土器に位置づけられる廉状文をもつ壺や無頸壺、甕などが出土しており、九州南部の弥生時代における瀬戸内系土器を検討した河野裕次の分類によると「瀬戸内ⅠA」に分類されている（河野2011）。これらの土器は弥生時代後期初頭～前葉に位置づけられている。松木菌式の下限については、後続する中津野式が近年の型式学的研究により、その上限が古墳時代初頭以降とされているため（久住2015）、松木菌式は弥生時代終末期までを含んで考える必要がある。

(3) 中津野Ⅰ式

中津野Ⅰ式は、甕5・6類、壺Ya2類、壺K3・4類、高杯A1類で構成される。この段階から高杯が出現する。川骨遺跡土器集中5や堂園遺跡B地点18号竪穴住居跡、持躰松遺跡土器溜まりなどが該当する⁶⁾。

中津野Ⅰ式の年代を知る手がかりとして甕の調整技法があげられる。近年、穂園さやかによる中津野式土器の調整技法の検討により、中津野式の甕には内面ケズリが施される個体があることがわかってきた（穂園2015）。この製作技術は古墳時代を遡るものではなく、久住編年ⅡA期に該当することから、その上限は布留0式併行＝古墳時代初頭に位置づけることができ、（久住2015）中津野式も同時期として捉えることができる。

(4) 中津野Ⅱ式

中津野Ⅱ式は、甕5～7類、壺Ya3・4類、壺K3～5類、高杯A2・3類で構成される。芝原遺跡土器集中遺構3号や不動寺遺跡H20SR1流路2、保養院遺跡土器溜まり2などが該当する。

中津野Ⅱ式の年代を知る手がかりは、萩原遺跡の住居跡から出土した小型椀形高杯である。この小型椀形高杯は、湧水町の永山10号墳（河口ほか1973）から類似した高杯が出土しており、久住の分析によると「檀佳克（2004）の「球磨Ⅱb期（夏女1式）」に位置づけられ、熊本平野の資料を媒介にして北部九州のⅡB期に併行する資料としてよい。」（久住2015：p.69）とある

ことから、古墳時代前期前半に位置づけることができる。

(5) 東原Ⅰ式

東原Ⅰ式は、甕7～9類、壺Ya4・5類、壺Yb4類、壺K4・5類、高杯A3・4類、高杯B1・2類、埴F1・2類、埴S1・2類で構成される。清水前遺跡土器溜まりや妻山元遺跡土坑2号などが該当する。

東原Ⅰ式の年代を知る手がかりとして、清水前遺跡土器溜まりから出土している布留式系甕が知られている（上東ほか2011）。この布留式系甕は久住猛雄の分類のⅡC期に位置づけられており（久住2015）、古墳時代前期中葉ごろと考えられる。そのほかに、長島町の山門野遺跡2号住居址（宮田ほか1983）からは、在来系の甕に加えて、布留系甕や肥後地方との関連が想定できるタタキを有する甕が出土している（甲斐2013）。この資料は久住編年のⅢA期に位置づけられている。また、熊本県水俣市の北園上野古墳群では、その地勢的特徴から、九州南部の土器と肥後地方の土器が混在して土器様式を形成していることが確認されている。北園上野古墳群10区SK03からは形態的には甕8類に類似するが、タタキを有する甕が出土しており、その甕とⅢA期に位置づけられる布留系甕が共伴している（木村ほか2020）。

以上の点を考慮すると、東原Ⅰ式は久住編年のⅡC期からⅢA期に併行すると考えられ、古墳時代前期中葉に位置づけることができる。

(6) 東原Ⅱ式

東原Ⅱ式は、甕9・10類、壺Ya4類、壺K6類、高杯A4類、高杯B3類、埴F4・5類、埴S2・3類で構成される⁷⁾。東原遺跡住居跡や下ノ原B遺跡5号竪穴住居跡、上野原遺跡9号竪穴住居跡などが該当する。東原Ⅱ式の年代を知る手がかりは今のところ外来系遺物との共伴関係がないため不明である。そのため、現段階では東原Ⅰ式から後述する辻堂原式の移行期として捉え、古墳時代前期後葉から中期前葉に位置づける。

(7) 辻堂原式

辻堂原式は、甕10～12類、壺Ya5類、壺K5・6類、高杯B2～4類、高杯Cb1・2類、埴F4～6類、埴S2・4類で構成される。辻堂原遺跡58号住居址や下鶴遺跡竪穴住居跡17号、吹上小中原4号住居跡などが該当する。

辻堂原式の段階から須恵器との共伴関係が見られるようになる。なかでも吹上小中原4号住居跡では、TK208型式の須恵器有蓋高杯や甕との共伴関係がみられ、年代を決める上でひとつの定点となっている。その他に、上水流遺跡10号竪穴住居跡からはTK216型式に位置づけられる須恵器把手付椀が出土している。以上の点から、辻堂原式はTK216型式～TK208型式に相当し、古墳時代前期中葉を中心とした時期に位置づけられる。

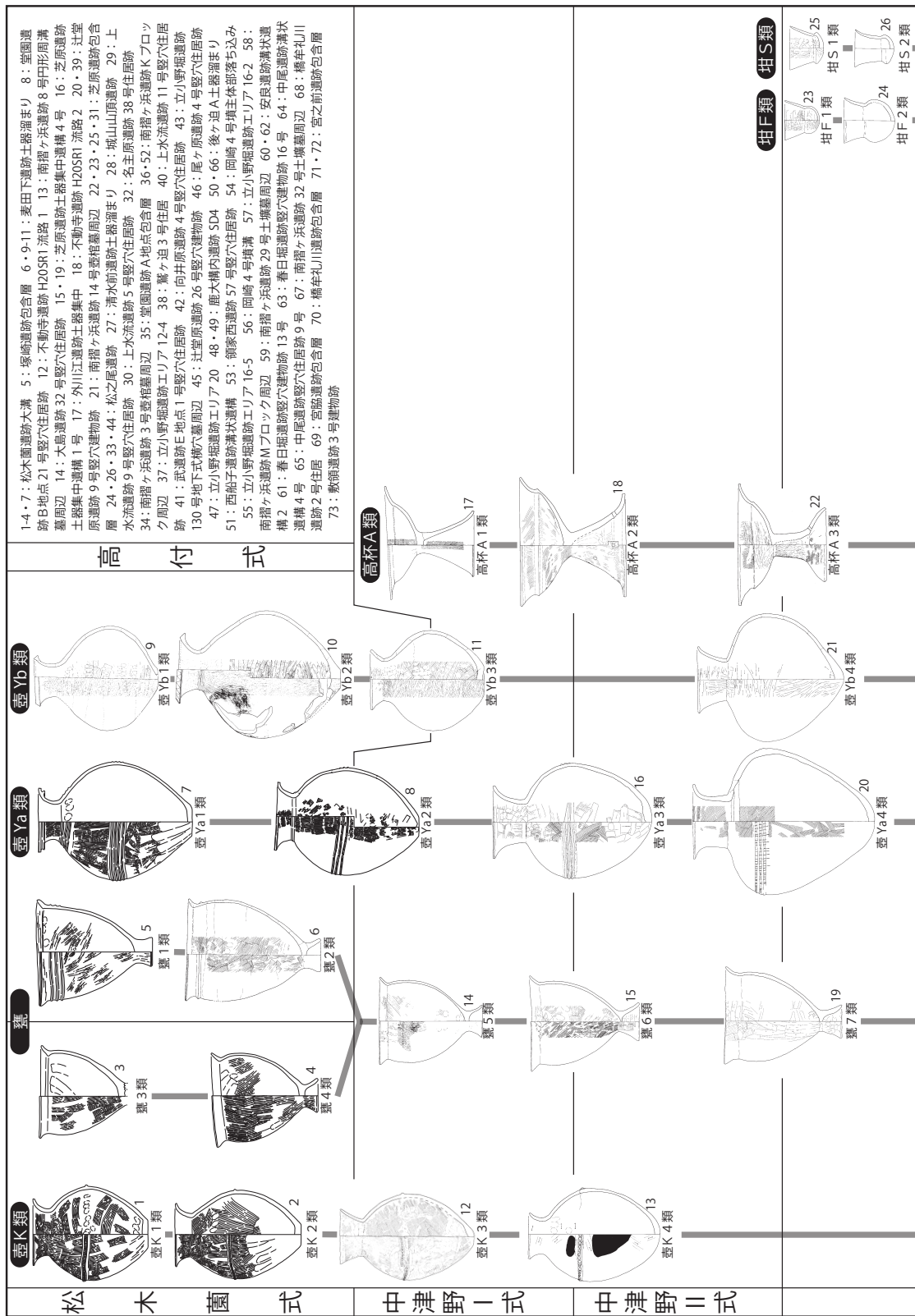


図 38 土器編年図 1

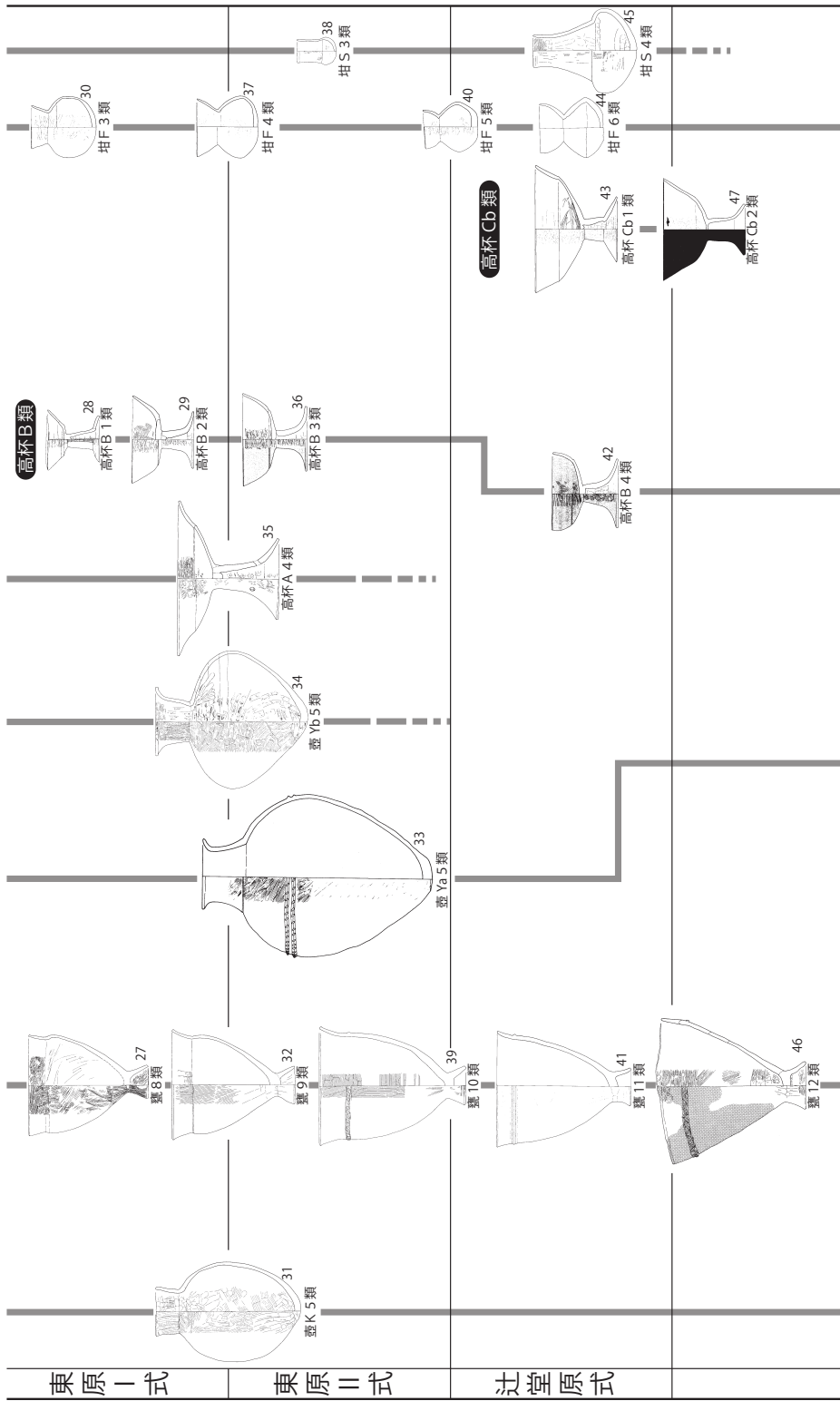


図 39 土器編年図 2

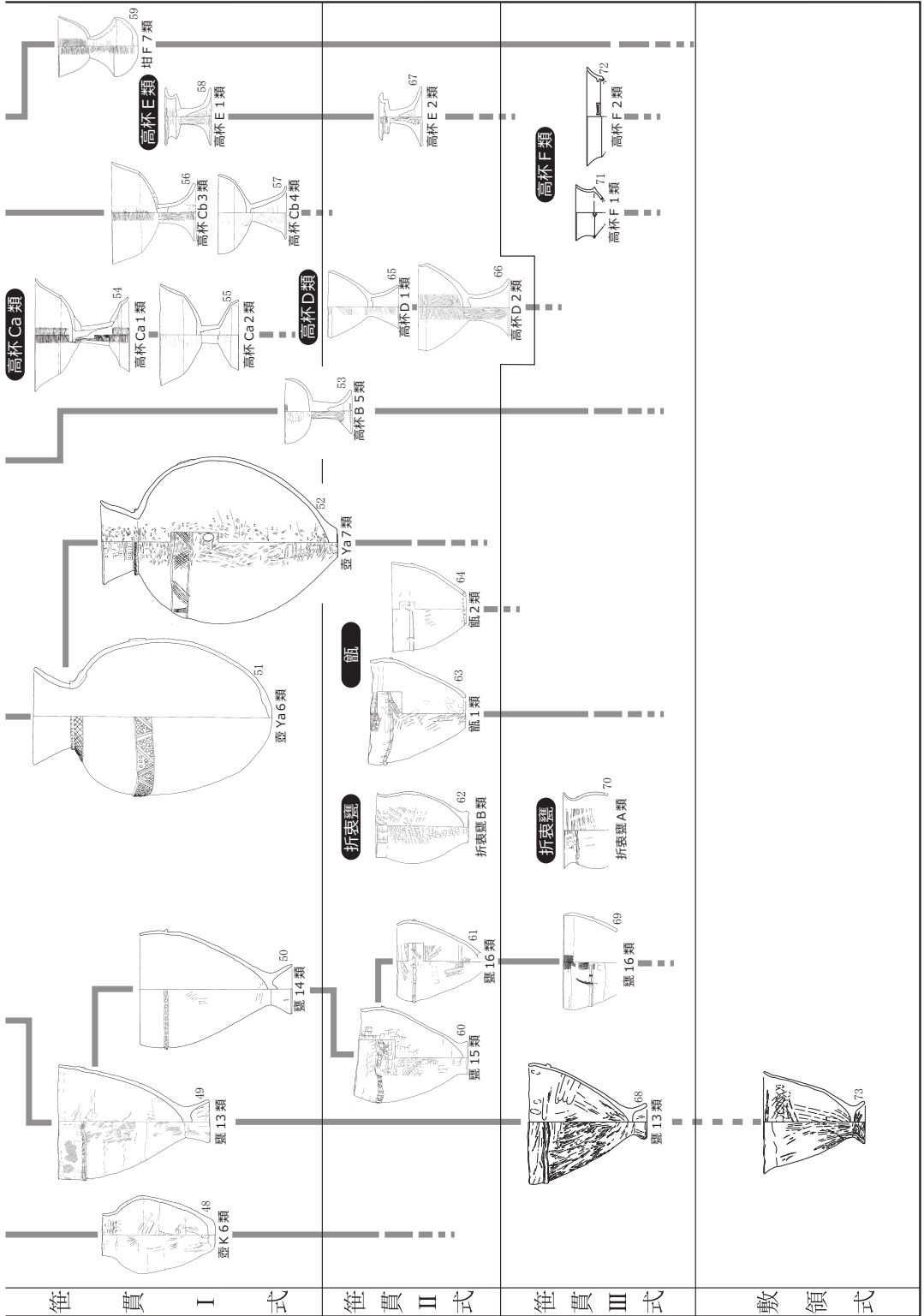


図 40 土器編年図 3

表25 各様式の構成土器

様式名	甕	壺	高杯	埴	甌	外来系土器
高付式	1・2類	Ya1・2類 Yb1・2・3類				西南四国系土器
松木菌式	3・4・5類	Ya1・2類 K1・2・3類				瀬戸内系土器
中津野Ⅰ式	5・6類	Ya2類 K3・4類	A1類			
中津野Ⅱ式	5・6・7類	Ya3・4類 K3・4・5類	A2・3類			小形碗形高杯 (久住編年ⅡB期)
東原Ⅰ式	7・8・9類	Ya4・5類 Yb4類 K4・5類	A3・4類 B1・2類	F1・2・(3)類 S1・2類		布留式系甕 (久住編年ⅡC期～ⅢA期)
東原Ⅱ式	9・10類	Ya4類 K6類	A4類 B3類	F4・5類 S2・3類		
辻堂原式	10・11・12類	Ya5類 K5・6類	B2・3・4類 Cb1・2類	F4・5・6類 S2・4類		須恵器 (TK216型式～TK208型式)
笹貫Ⅰ式	12・13・14類	Ya5・6・7類 K6・7類	B3・4・5類 Ca1・2類、Cb2・3類 E1類	F4・5・6・7類 S3類		須恵器 (TK23・47型式～TK43型式)
笹貫Ⅱ式	14・15・16類 折衷甕B類	Ya7類 K6・7類	B4・5類 D1・2類、E2類	F7類	1・2類	須恵器 (TK209型式～TK217型式)
笹貫Ⅲ式	14類・16類		F1・2類		1類	須恵器・土師器 (土器様相Ⅲ-1期)
敷領式	脚台付無文甕					須恵器・土師器 (土器様相Ⅲ-2期)

(8) 笹貫Ⅰ式

笹貫Ⅰ式は、甕12～14類，壺 Ya5～7類，壺 K6・7類，高杯 B3～5類，高杯 Ca1・2類，Cb2・3類，高杯 E1類，埴 F3～7類，埴 S3類で構成される。鹿児島大学構内遺跡 SD4 や尾ヶ原遺跡 3号堅穴住居跡，西船子遺跡溝状遺構，白糸原遺跡堅穴住居跡16号などが該当する。笹貫Ⅰ式については，甕12・13・14類が相伴していることが多く，甕の型式変化に時間的な差が存在するののかについて明らかにすることができない。反対に甕の型式変化や時間差が緩慢となることが笹貫Ⅰ式の特徴とも言える。他の器種をみた場合，高杯 B5類が出現することや，高杯 E1類が出現することで画期を見出すこともできるが，出土数が限られており，笹貫Ⅰ式の細分は今後の資料蓄積を待ちたい。

笹貫Ⅰ式の年代を知る手がかりは，古墳時代中期後半～古墳時代後期に位置づけられる相伴する須恵器である。TK23・47型式の須恵器は，白糸原遺跡堅穴住居跡 3・4号，岡崎 4号墳主体部落ち込み，麦之浦貝塚 1号住居跡，尾ヶ原遺跡 3号堅穴住居跡，白糸原遺跡堅穴住居跡 16号などで出土している。MT15型式の須恵器は，南摺ヶ浜遺跡Mブロック周辺で，TK10型式の須恵器は下鶴遺跡堅穴住居跡64号，尾ヶ原遺跡 2号堅穴住居跡，鹿児島大学構内遺跡 SD4などで出土している。TK43型式の須恵器は白糸原遺跡堅穴住居跡 9号でみられる。以上の点から，笹貫Ⅰ式は TK23・47型式～TK43型式を中心とする時期に該当し，古墳時代中期後葉～古墳時代後期後葉に位置づけられる。

(9) 笹貫Ⅱ式

笹貫Ⅱ式は甕14類～16類，折衷甕B類，壺 Ya7類，壺 K6・7類，高杯 B4・5類，高杯 D1・2類，高杯 E2類，埴 F7類，甌 1・2類で構成される。この段階から，笹貫式の甕は口縁部形態だけでなく，突帯の刻目の間隔がまばらになることや，木製工具ではなく指頭による刻目が施される点など新たな装飾方法が加わることに特徴があり，これは中村直子が指摘した笹貫式新段階の特徴（中村2009）を備えているものと言える。また，新器種として甌が加わる点，これまで弥生時代から続く伝統的な煮炊き調理に加えて，蒸す調理を加えた点で大きな

画期と言える（松崎2020）。また、甑の出現と合わせて、折衷甕B類が出現している点も大きな変化である。この点は後述する。

笹貫Ⅱ式の年代を知る手がかりは、相伴する須恵器である。TK209型式に位置づけられる須恵器は、中尾遺跡溝状遺構4号、安良遺跡堅穴建物跡1・2号などから出土している。TK217型式に位置づけられる須恵器は、上苑A遺跡堅穴住居3や安良遺跡溝状遺構2などで出土例が見られる。以上の点から笹貫Ⅱ式はTK209型式～TK217型式の時期に位置づけられる。

(10) 笹貫Ⅲ式

笹貫Ⅲ式は現在のところ、指宿地域と志布志湾沿岸のみで確認できる。指宿地域では、橋牟礼川遺跡において7世紀後半に堆積したと考えられている開聞岳の噴出物「青コラ火山灰」を上層から掘り込んだ住居跡が、現在までのところ7基確認されている。また、指宿市北部の宮之前遺跡では青コラ火山灰と874年に噴出した開聞岳噴出物「紫コラ火山灰」に挟まれた遺物包含層から、成川式土器と土師器・須恵器類が出土している。これらの土器の特徴としては、甕は古墳時代後期の笹貫Ⅰ式と類似しており、大きな形態や大きさ、装飾などに変化がみられない。そのため、指宿地域では須恵器が相伴しない場合、笹貫Ⅲ式の位置づけは甕単体だけではなく、下記に示す高杯F類が出現するなどの特徴で判断せざるを得ない。高杯F類は、笹貫Ⅲ式から出現する器種で、外面に瘤状の突起をつけたり、内面に把手を貼り付けるなど、それまでみられた高杯とは様相を異にするものである。ただし、杯部も破片のみが出土している状況であり、高杯F類の実態については不明な点が多い。

志布志湾沿岸地域では、宮脇遺跡において甕16類に位置づけられる資料が出土している。この資料は、刻目の間隔が笹貫Ⅱ式段階の甕16類と比較してさらに広がっていることを考えると、型式学的に笹貫Ⅱ式よりも新しいことが推定できる。

以上の点をまとめると、笹貫Ⅲ式は甕14類、甕16類、高杯F類によって構成され、他の器種は須恵器や土師器の杯類で補っていた可能性が高い。煮炊具とわずかな高杯のみ在地生産を行い、他の器種は外来系のものを取り入れていたと考えられる（下山1995）。また、笹貫Ⅲ式段階から指宿地域と志布志湾沿岸地域において前者では笹貫Ⅰ式の伝統を引き継ぎ、後者は笹貫Ⅱ式からさらに型式変化し、両地域で甕の形態が明確に異なるようになる。

笹貫Ⅲ式の年代については、青コラ火山灰をその上限と考え、相伴する須恵器で年代を検討する必要がある。橋牟礼川遺跡SB7では、高台付須恵器杯と甕14類、高杯F類が出土しており、この須恵器の年代は、中島恒次郎の編年（中島2015）で「土器様相Ⅲ－1期」に位置づけられることから、8世紀前半～中頃と考えられる。また、宮之前遺跡は包含層出土ではあるが、同じく「土器様相Ⅲ－1期」に位置づけられる資料が多く出土していることから、ある程度のまとまりをもった土器群であると判断できる。

志布志市宮脇遺跡においても包含層出土ではあるが、くびれた平底をもつ甕や甑に加えて、高台付の須恵器杯や土師器杯などの供膳具類が出土している。これらの資料は中島編年のⅡ－2期にあたり、7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられ、上記の橋牟礼川遺跡の例よりも若干古い、同様の時期であると言える。以上の点から、笹貫Ⅲ式は7世紀後半～8世紀中頃に位置づけることができる。

(11) 敷領式

敷領式は、成川式土器の中で最新の様式である。現在のところ、敷領遺跡十町地点土器溜まり、敷領遺跡3号建物跡、橋牟礼川遺跡第6層から出土している。その特徴は、①甕の単一型式、②脚台を有する、③器壁が薄く、硬質、④器面の歪みが大きいなどである。笹貫Ⅲ式の土器と比較しても形態的・技術的断絶が大きく、脚台がつくという特徴から広義の成川式土器の範疇で捉えることはできるが、型式学的連続性はみられない。そのため、編年図上では同一系譜に位置づけられるものか現在のところは不明なままにしておきたい。

その他の器種については、須恵器杯、土師器杯、土師器甕、須恵器横瓶などがみられ、律令制期の土器様式の中に、敷領式の甕が混在しているような状態である。

敷領式の年代を知る手がかりは、指宿地域で見られる開聞岳噴出物層である。この火山灰は通称紫コラ火山灰層と言われており、『日本三代実録』に記載された開聞岳噴火記事を手がかりに、これまで火山学、文献史学、考古学の立場からその降下年代と記載記事の火山灰の探索や比定が進められてきた（成尾1992、永山1992、下山1993）。その結果、紫コラ火山灰の降下年代は貞観16年3月4日（西暦874年3月25日）であることがわかり、以後の発掘調査時に年代を知るための鍵層として利用されてきた。また、この火山灰層によって直接被災した建物跡や畑や水田といった耕作地に至るまで確認できており、当時の集落の状況を復元する上で非常に重要な役割を果たしている。とくに、敷領遺跡3号建物跡ではこの紫コラ火山灰層によって倒壊した建物内から当時の調理道具や食膳具一式が出土しており、一括性の高い遺物群であることがわかっている（中摩ほか2015）。また、この建物内には火山噴火の一次硬化物の堆積がみられず、屋外にのみ堆積していたことから、噴火当時は屋根が機能している状態であったことが推定でき、これらの土器の年代と火山灰層の堆積時期は極めて近いと言える。そのため、敷領式は8世紀後半から9世紀後半に位置づけることができる。

7. 成川式土器の変遷過程

ここまで、弥生時代後期から古代の九州南部の土器を分類し、型式学的に序列づけて、土器編年を作成した。これをもとに、成川式土器の展開から終焉にかけて考察してみたい。

まず、成川式土器の前段階にあたる高付式、松木藪式についてである。高付式は、近年大隅半島の調査事例が増加したことから資料蓄積が著しく、瀬戸内系土器とも共伴することから、弥生時代後期前葉から中葉に位置づけることができる。これに後続する土器は、井手上A遺跡や高久田遺跡で確認することができるが、具体的な年代を知る手がかりがない。そのため、高付式を新古の関係で分離することは難しいため、この点は今後の課題としたい。

高付式と同時期とされる松木藪式は、近年資料が蓄積されており、弥生時代後期初頭から前葉の時期が考えられる。その後に後続する土器は型式学的には確認できるが、明確な時期区分が可能な資料は今のところみられていない。そのため、高付式と同様、松木藪式も弥生時代後期～終末に位置づけられる土器様式と捉え、将来的に細分されることが望ましい。

中津野Ⅰ・Ⅱ式は、近年の型式学的検討（久住2015）により、その年代がこれまでの「弥生時代終末から古墳時代初頭」という認識から下がり、古墳時代初頭から前葉に位置づけられることがわかってきた。その一つの要因として、薩摩半島西岸域を中心とした芝原遺跡などの拠

点的な遺跡において、外来系遺物との共伴関係が確認できるようになってきたことが大きい。そのため、型式学的な分類と外来系遺物の年代観がおおよそ整合性をもっていることが明らかとなり、古墳時代前期初頭から中期前葉を中津野Ⅰ式から東原Ⅱ式の4段階に区分できた。また、続く辻堂原式の段階から須恵器との共伴例が確認できることから、辻堂原式は古墳時代中期中葉ごろに位置づけられる。

成川式土器編年の中でもっとも大きな変化が起きるのが笹貫式である。笹貫式の段階に入ると、甕は口縁部形態が内湾気味を呈し、全体形がバケツ型になり、壺も幅広突帯を有する資料が増加する。また、埴F類や埴S類も原型となる布留式系や瀬戸内系の小型丸底壺から大きく変容し、サイズも大型化するなど在地のデフォルメが著しくなる。概して、本論冒頭で述べた「成川式土器」の特徴はこの笹貫Ⅰ式段階からの様相であり、成川式土器をもっとも特徴づけている段階であると言える。

先行研究では新出資料が相次いだことにより、笹貫式の年代幅が大きく下る結果となっていたが、中村直子による型式学的検討（中村2009）により、新古の関係が示されたことは既に述べた。本論でも中村の分類基準を参考にしながら、分類を行った結果、笹貫式を3つの段階に分けられることがわかった。

笹貫式の中でもっとも大きな変化としてあげられるのが、笹貫Ⅱ式である。まず、土器分布圏の狭小化である。図41は笹貫式以降の成川式土器分布圏の変遷過程を模式的に示したものである。これをみると笹貫Ⅰ式段階までは、鹿児島県全域に分布していたが、笹貫Ⅱ式段階から、土器様式の分布が大きく志布志湾沿岸地域と鹿児島湾沿岸に偏ることがわかり、北薩地域や薩摩半島西岸域では笹貫Ⅱ式の分布がほとんど見られなくなることがわかった。この土器様式圏の矮小化は、続く笹貫Ⅲ式、敷領式にかけても続く現象で、成川式土器は笹貫Ⅱ式の段階を画期にその分布圏を大きく狭めていることがわかった。

2つ目に、新器種の増加があげられる。笹貫Ⅱ式段階から、須恵器高杯を模倣したと考えられる高杯D類や、甗、折衷甕が土器様式の中に加わっている。とくに、甗については大隅半島域で多く確認されており、そのほとんどに笹貫式甗にみられるような突帯を有している点に特徴がある。筆者はこのような甗の発生を九州南部特有の現象と考え、これらの資料を「九州南部型甗」と呼んでいる（松崎2020）。しかし、甗は出土しているが、カマドなどの調理施設は九州南部でほとんど導入されて



図 41 笹貫Ⅰ式以降の様式分布圏

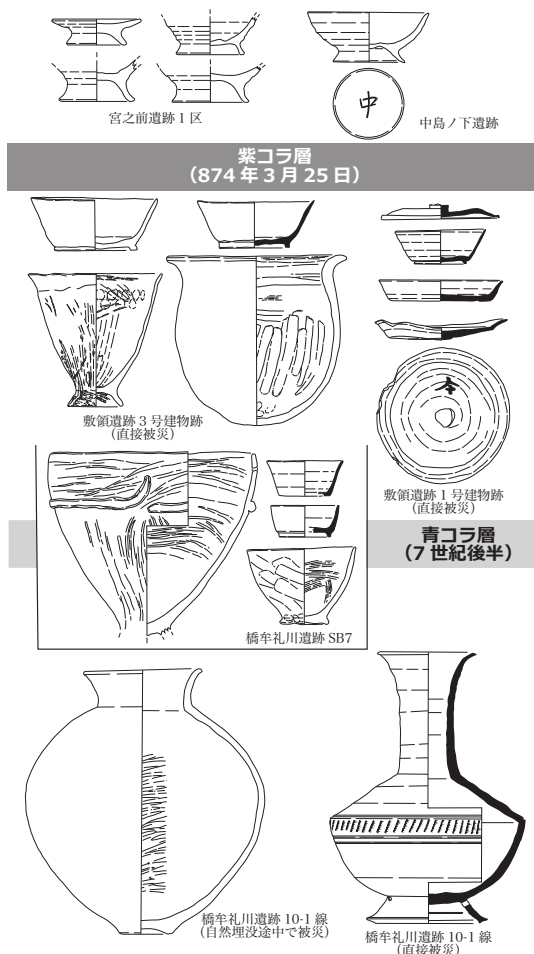


図 42 火山灰上下の出土遺物 (中摩・松崎ほか 2019)

ていないが鉢などに限定されるようになる。そのため、一見、器種の減少により、使用する土器が減ったように見えるが、供膳具類は土師器・須恵器の杯類が普及し、使用されるようになる。そのため、在地土器様式の中でも煮炊具を除き、供膳具だけは在地生産ではなく、外来系器物を取り入れている可能性がある(下山1995)。

甕については、笹貫Ⅱ式に見られたようなまばらな刻目をもつような甕は志布志湾沿岸だけに限定され、指宿地域では粗雑に貼り付けた不整形突帯が貼りつけられる。さらに、指宿地域では先述したように甕などの蒸す調理に必要な器種はなく、笹貫Ⅰ式から続く古墳時代的な甕を使用していることから、志布志湾沿岸地域と地域差があることがわかる。

敷領式は現在のところ、敷領遺跡と橋牟礼川遺跡で確認でき、指宿地域でも南部だけに分布する限られた土器様式である。敷領式の特徴は先述したとおりだが、器種は甕に限定されることが特徴で、他の器種は当該期の隣接地域と同様に、土師器・須恵器の杯類、須恵器貯蔵具など、律令制期の土器様式が用いられている。ただし、甕だけが在地色を残しているのではなく、土師器の丸底甕も導入しながら、在地伝統的な脚台付きの甕を用いているため、相互補完的な関係とも言い切れない。むしろ、調理の内容などによって使い分けを行っている可能性もあり、

おらず、どのように蒸し調理を行ったかが問題となる。この点について筆者は、えびの市天神免遺跡の事例をもとに甕の口～頸部径と甕外面に付着したススの下端径を計測し、九州南部型甕は内湾する笹貫式段階の甕ではなく、外反する口縁部をもつ折衷甕であることを明らかにした。さらに、甕の外面には明瞭にススが付着することから、カマドではなく炉を用いた蒸し調理が行われていた可能性を指摘した。そのため、笹貫Ⅱ式で出現する九州南部型甕と折衷甕B類は蒸し調理を行うためのセットとなって出現した可能性が高い。

以上のように、笹貫Ⅱ式はその分布圏を狭めながらも、須恵器を模倣した器種や隣接地域の土器様式を模倣して新たな調理技術を在地土器様式へ組み込んでいる点などに特徴があるといえる。ただし、笹貫Ⅱ式段階において、鹿児島湾沿岸の中でも指宿地域だけは、高杯D類や甕は出現しない。これらの現象が、続く笹貫Ⅲ式を特徴づけている。

笹貫Ⅲ式になると、先述した分布域がさらに狭小化し、指宿地域と志布志湾沿岸地域に限定されるようになる。また、器種も甕13・16類と高杯F類、それに加えて今回は分類し

は、指宿市の北部に位置する中島ノ下遺跡や宮之前遺跡で確認することができる。特に宮之前遺跡では、紫コラ火山灰層の直上から10世紀中頃に位置づけられる土師器杯や須恵器、墨書土器、開元通宝などが出土しており、紫コラ火山灰層直下層でみられた敷領式の様相は確認することができない。

そのため、敷領式は開聞岳貞観噴火によって途絶した可能性が高く、古墳時代初頭から続く成川式土器の伝統は終焉を迎える形となった。この土器文化の終焉は、噴火によって人々が死滅して引き起こされたというわけではない。その理由として、噴火後に周辺住民が亀卜を求める記述が『日本三代実録』中に記されていること、敷領遺跡では火山噴出物層を除去した「災害復旧痕跡」が確認されていることなどがあげられる（鷹野2014）。当地の人々は噴火時には一度避難し、復旧を試みたが、生活を再開させるには至らなかった。それに加え、国家の対応は古い等の宗教的行為のみで、具体的支援策は講じられず、地元の公共施設も対応がとれなかったことが考えられている（中摩ほか2019）。しかし、人々の避難先は発掘調査では確認できておらず、その後の生活痕跡をたどることは現状では難しい。そのため、成川式土器の最終段階である敷領式の終焉理由については、開聞岳の噴火による影響が大きいと考えられるが、この点についてはさらに分析を深めたい。

以上、成川式土器の成立から展開、そして土器様式の終焉までの様相を土器の分類・編年という手法を用いて検討してきた。結果、弥生時代後期から平安時代前半期の土器を10期に区分できるようになり、外来系遺物をもとにした併行関係についても整理することができた。冒頭でも述べたように、本研究の目的は、「成川式土器の終焉過程」であり、その様相を明らかにするためには笹貫Ⅰ式から敷領式の様相解明と合わせて、指宿市内における平安時代の火山災害の様相解明も進めていく必要があるが、この点については別稿を用意したい。

8. おわりに

本論では、九州南部における弥生時代後期から平安時代前半期までの土器を分類、型式組列を作成して土器編年を構築した。結果、現行でもっとも利用されている中村編年を細分する結果となり、他地域との併行関係についても近年蓄積されてきた資料をもとに相対的に比較することができた。しかし、本研究の目的は「成川式土器の終焉過程」の解明であり、それを達成するには笹貫Ⅰ式から敷領式にかけての古墳時代後期から平安時代前半期の様相解明が必要であることがわかった。とくに、笹貫Ⅱ式以降、土器様式の分布圏が狭小化する現象と、古代土師器の普及範囲が広がるかについては、今後の課題である。また、成川式土器の伝統が最後まで残る薩摩半島南端域の指宿地域の様相については、火山災害の状況と集落の消長を合わせて検討する必要がある。これらの課題については別稿で検討することとしたい。

注

- 1) その理由として、在地土器編年の基軸として役割を果たしてきた甕の器形変化が緩慢であり、画期を捉えることが難しいことがあげられる（吉本2006）。
- 2) 土器の折衷現象は、時代・地域を問わず普遍的なもので、九州南部の古墳時代でも全時期を通じて隣接諸地域との折衷現象は認められている。本論では、成川式土器の終焉に着目す

- るため、笹貫式新段階以降の折衷甕を取り扱う。
- 3) 編年図には上げ底となる完形資料を掲載している。今後の資料増加を待ちたい。
 - 4) 良好な資料がない場合は、包含層出土資料も含む。
 - 5) 高付式新段階に位置づけられる資料が志布志市井手上 A 遺跡で確認されている（中村 2012）。今後、これらの資料が、弥生終末に位置づけられるか再検討が必要である。
 - 6) 外川江遺跡土器溜まりはある程度の時間幅を持っている。
 - 7) 壺 Yb5 類は明確な共伴資料がないが、南摺ヶ浜遺跡 3 号壺棺墓周辺で 埴 F 3・4 類と考えられる資料の周辺から出土しているため、東原 I・II 式に位置づけたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、指導教員の渡辺芳郎先生をはじめ、石田智子先生、中村直子先生にご指導を賜りました。また、下記の方々や諸機関にも資料調査等でお世話になりました。記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）

新垣匠 上田洋子 大西智和 鐘ヶ江賢二 鎌田洋昭 木村龍生 久住猛雄 栗畑光博 相美伊久雄 関明恵 近沢恒典 中摩浩太郎 西牟田瑛子 橋本達也 東和幸 山元瞭平 横手伸太郎 興嶺友紀也 渡部徹也

鹿児島県立埋蔵文化財センター 志布志市埋蔵文化財センター 歴史交流館金峰

参考文献

- 青崎和憲・日高孝治（編）1981『小田遺跡（隼人塚団地 B 地点）』鹿児島県住宅供給公社
- 青崎和憲・繁昌正幸・安田喜憲・松下孝幸（編）1984『外川江遺跡・横岡古墳』鹿児島県教育委員会
- 旭慶男・井ノ上秀文（編）1986『西船子遺跡』喜入町教育委員会
- 池畑耕一 1980「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号 pp.1-41 鹿児島県考古学会
- 池畑耕一・彌榮久志・出口浩・久保二男（編）1977『辻堂原遺跡』吹上町教育委員会
- 池畑耕一・稲村博文・山下博文・河野賢太郎（編）2008『名主原遺跡』鹿屋市教育委員会
- 池畑耕一・鶴田静彦（編）2004『博労町遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 池畑耕一・西園勝彦（編）2005『二子塚 A 遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 池畑耕一・三垣恵一（編）2006『中尾遺跡・四方高迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 井手上誉弘・国際文化財株式会社（川田秀治・武田芳雅・四家礼乃）（編）2017『荒園遺跡 1 第 1 地点』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 稲村博文（編）2016『白坂原遺跡・住吉遺跡・伊敷遺跡』鹿屋市教育委員会
- 岩澤和徳・小林晋也（編）2010『尾付野山遺跡・向井原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 岩屋高広・平美典（編）2011『南下遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 上東克彦・福永裕暁・下大田好江（編）2011『清水前遺跡』南さつま市教育委員会
- 鵜飼一伸・羽生文彦（編）1999『後ヶ迫 A 遺跡』垂水市教育委員会
- 牛ノ濱修・橋口拓也（編）2008『鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡』鹿児島県立埋蔵文

化財センター

- 牛ノ濱修・宮田栄二・彌榮久志（編） 1985『成岡遺跡Ⅱ』鹿児島県教育委員会
- 内村憲和（編） 2014『麦田下遺跡』大崎町教育委員会
- 内村憲和（編） 2015『高久田A遺跡』大崎町教育委員会
- 宇野隆夫 1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新－律令制的食器様式の確立過程－」『日本考古学』第7号 pp.25-41 日本考古学協会
- 上床真・小田裕人（編） 2020『安良遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 大野重昭・東和幸・西中川駿（編） 1991『平松原遺跡』鹿児島県教育委員会
- 小倉浩明・佐藤真人（編） 2011『水天向遺跡』さつま町教育委員会
- 甲斐康大 2013「九州南部における古墳時代前期の地域間交流」『古墳時代の地域間交流1』 pp.39-58 九州前方後円墳研究会
- 甲斐康大 2015a「九州南部の古墳時代食膳具の変化－精製赤彩土器の出現－」『Archaeology From the South III－本田道輝先生退職記念論文集』 pp.195-205 本田道輝 先生退職記念事業会
- 甲斐康大 2015b「成川式土器の北のひろがり」『成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器－』鹿児島大学総合研究博物館
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館 1990『鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録（Ⅶ）考古』
- 鎌田浩平 2009「成川式土器の地域編年－薩摩半島側鹿児島湾沿岸とその周辺を対象域として－」『南の縄文・地域文化論考－新東晃一代表還暦記念論文集』中巻 pp.129-152
- 鎌田浩平 2014「薩摩半島西海岸側の地域編年に向けての基礎作業－甕・壺形土器を対象として－」『Archaeology from the South II－新田栄治先生退職記念論文集』 pp.191-204 新田栄治先生退職記念事業会
- 上村俊雄・出口浩（編） 1974「吉野町七社遺跡（2）」『鹿児島考古』第9号 pp.109-123
- 亀田修一 2003「古墳時代中・後期の土器」『考古資料大観』3 pp.41-48 小学館
- 河口貞徳 1976「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 pp.5-130 鹿児島県考古学会
- 河口貞徳・河野治雄・池水寛治・平田信芳・上村俊雄・林敬三郎・出口浩 1973「永山遺跡」『鹿児島考古』第8号 pp.1-58 鹿児島県考古学会
- 川口雅之 2018「古代の薩摩・大隅国，多禰嶋における律令制度の普及－考古学の研究成果から－」『縄文の森から』第10号 pp.1-18
- 川口雅之・木之下悦朗・福永修一・馬籠亮道（編） 2020『春日堀遺跡1』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 川口雅之・山元真美子・加藤ゆかり・東和幸・長崎慎太郎（編） 2003『楠元遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 川添俊行（編） 2006『時吉北川遺跡』さつま町教育委員会
- 川畑昭光・池畑耕一・長野眞一・彌榮久志・青崎和憲・堂込秀人・山口俊博・戸崎勝洋・宮田栄二・繁昌正幸・松下孝幸・石田肇・佐熊正史・用丸英博・分部哲秋・五味克夫（編）

- 1983『成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡』鹿児島県教育委員会
- 河野賢太郎（編）2012『外戸口遺跡』鹿屋市教育委員会
- 河野賢太郎・稲村博文（編）2007『薬師堂の古墳・祓川地下式横穴墓群』鹿屋市教育委員会
- 河野裕次 2011「南部九州における弥生時代瀬戸内系土器の基礎的研究」『地域政策科学研究』第8号 pp.39-73 鹿児島大学
- 河野裕次 2019「宮崎平野南部における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相－編年の細別と外来系土器の影響について－」『宮崎考古』第29号 pp.13-33 宮崎考古学会
- 木村龍生・唐木ひとみ・坂田美智子・春川香子・堤章子（編）2020『北園上野古墳群』熊本県教育委員会
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIV
- 久住猛雄 2015「「土師器」の中の「成川式」土器－中津野式から辻堂原式にかけて－」『成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器－』pp.67-84 鹿児島大学総合研究博物館
- 久保田昭二・辻明啓（編）2009『南摺ヶ浜遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 黒川忠広・吉岡康弘・有馬孝一・新中なるみ・福原誠也・益山郁恵（編）2011『下鶴遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 小林晋也・日高勝博・上床真（編）2011『渡畑遺跡2』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 小村美義（編）2001『宮脇遺跡』志布志市教育委員会
- 相美伊久雄 2014「南九州東端域における7～8世紀の土器様相－志布志湾北岸域の甕形土器を中心に－」『Archaeology From the South II－新田栄治先生退職記念論文集－』pp.221-238 新田栄治先生退職記念事業会
- 相美伊久雄 2015「木葉痕をもつ成川式土器」『Archaeology from the South III－本田道輝先生退職記念論文集－』pp.185-194 本田道輝先生退職記念事業会
- 相美伊久雄・坂元裕樹（編）2012『安良遺跡』志布志市教育委員会
- 佐々木幸男・出口浩・吉永正史・森岡久美子（編）2004『武遺跡E地点』鹿児島市教育委員会
- 佐藤真人（編）2016『猿後遺跡・向井原遺跡』さつま町教育委員会
- 下鶴弘（編）1993『萩原遺跡Ⅲ』始良町教育委員会
- 下山覚 1990「鹿児島県指宿市橋牟礼川遺跡に見る火山災害史と文化変異」『日本考古学協会第56回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 下山覚 1992「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』第8号 pp.65-80 人類史研究会
- 下山覚 1993「橋牟礼川遺跡の「被災」期日をめぐる編年的考察－「日本三代実録」貞観16年7月29日条についての考古学的アプローチ」『古文化談叢』第30集（下）pp.1179-1193 九州古文化研究会
- 下山覚 1995「考古学からみた隼人の生活－「隼人」問題と展望－」新川登亀男（編）『西海と南島の生活・文化』pp.169-199 名著出版
- 下山覚・鎌田洋昭（編）1996『橋牟礼川遺跡Ⅺ』指宿市教育委員会
- 下山覚・渡部徹也・中摩浩太郎・鎌田洋昭（編）1999『敷領遺跡Ⅱ・弥次ヶ湯古墳』指宿市

教育委員会

- 新福深・児玉健一郎（編） 1996『後田山下遺跡』高山町教育委員会
- 杉井健 1994「甗形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』第28号 pp.31-56 大阪大学文学部
- 杉井健 2004「前方後円墳分布圏とその周辺における生活様式伝播の多様性」『文化の多様性と比較考古学』pp.307-314 考古学研究会
- 前幸男（編） 2006『古原第2地区』薩摩川内市教育委員会
- 関明恵・長野眞一・大久保浩二（編） 2013『芝原遺跡4』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 鷹野光行 2014「貞観噴火災害に対する復旧活動」鷹野光行・松崎大嗣（編）『敷領遺跡（十町地点・下原地点）の調査』pp.36-37 お茶の水女子大学・鹿児島大学
- 多々良友博 1981「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号 pp.89-116 鹿児島県考古学会
- 立神次郎・大久保浩二（編） 1993『東田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 立神次郎・鶴田静彦（編） 1994『稲村城跡』串良町教育委員会
- 立神次郎・前迫亮一（編） 2004『東免遺跡・曲迫遺跡・山神遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 田中琢 1978「型式学の問題」大塚初重・戸沢光則・佐原真（編）『日本考古学を学ぶ（1）』pp.12-23 有斐閣
- 田中良之・松永幸男（編） 1984「広域土器分布圏の諸相－縄文時代後期西日本における類似様式の並立－」『古文化談叢』第14集 九州古文化研究会
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 壇佳克 2004「人吉盆地における古墳時代の土器編年について－系統的視点からみた併行関係の再検討」『熊本古墳研究』第2号 pp.88-100 熊本古墳研究会
- 常田和彦・西久保淳美・有村なるみ・宮下麻貴子・吉富マユミ・肥塚弘美・鎌田浩平・池畑耕一・橋本達也（編） 2012『辻堂原遺跡』日置市教育委員会
- 鶴田静彦他（編） 1990『名主原遺跡・荷掛原遺跡』吾平町教育委員会
- 鶴田静彦・関明恵・福藺美由紀（編） 2011『川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 出口順一郎・堂込秀人（編） 2003『長田遺跡』有明町教育委員会
- 出口順一郎・東徹志・中水忍・中村直子・内山伸明（編） 2008『上苑A遺跡・穴倉B遺跡』志布志市教育委員会
- 出口順一郎・中村直子（編） 2012『井手上A遺跡（1・2次）』志布志市教育委員会
- 出口浩 1973「吉野町七社遺跡」『鹿児島考古』第8号 pp.156-183 鹿児島県考古学会
- 出口浩・繁昌正幸（編） 1981『花牟礼（大戸原）遺跡』高山町教育委員会
- 出口浩・吉永正史・永山修一・宮里論子・上村律子（編） 2000『一之宮遺跡B地点』鹿児島市教育委員会
- 出口浩・吉永正史・雨宮瑞生・宮里論子・上村律子（編） 2001『大龍遺跡』鹿児島市教育委員会
- 寺原徹（編） 2005『白糸原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 戸崎勝洋・吉永正史・松下孝幸・分部哲秋（編） 1981『松之尾遺跡』枕崎市教育委員会

- 富田逸郎・関明恵（編） 1994『本御内遺跡（舞鶴城跡）』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 中島恒次郎 2015「土器から考える遺跡の性格－大宰府・国府・郡家・集落－」『官衙・集落と土器1－宮都・官衙と土器－』 pp.93-130 奈良文化財研究所
- 中島哲郎・彌榮久志・成尾英仁（編） 1981『宮之前遺跡』指宿市教育委員会
- 中園聡 1986「弥生土器について」『鹿児島大学郡元団地内遺跡（J・7地点）』鹿児島大学理学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中園聡 1988「土器様式の動態－古墳の南限付近を対象として－」『人類史研究』第7号 pp.31-69 人類史研究会
- 中園聡 1991「甕棺型式の再検討」『九州考古学』第66号 pp.1-28 九州考古学会
- 中園聡 1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号 pp.104-119 人類史研究会
- 中園聡 2004『九州弥生分化の特質』九州大学出版会
- 長野眞一（編） 1994『保養院遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 長野眞一・中村耕治（編） 1983『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県教育委員会
- 長野陽介・藤井大祐（編） 2016『不動寺遺跡』鹿児島市教育委員会
- 長野陽介（編） 2019『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書Ⅻ』鹿児島市教育委員会
- 中摩浩太郎（編） 2010『南丹波遺跡Ⅱ』指宿市教育委員会
- 中摩浩太郎・鎌田洋昭・恵島瑛子（編） 2015『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市教育委員会
- 中摩浩太郎・松崎大嗣・鎌田洋昭・西牟田瑛子 2019「開聞岳火山災害と対応の実態－7世紀後半と874年の事例から－」『季刊考古学』第146号 pp.67-70 雄山閣
- 中村明蔵 1998「南島覓国使と南島人の朝貢をめぐる諸問題」『古代隼人社会の構造と展開』岩田書院
- 中村耕治・岩屋高広・廣栄次・松下建生・川元禎久（編） 2005『農業開発総合センター遺跡群Ⅰ（吹上小中原遺跡・馬廻遺跡・三反牟田遺跡）』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 中村耕治・鶴田静彦・遠矢勝幸・関明恵・石原田高広・川元禎久・福菌慶明・湯ノ前尚・藤崎光洋（編） 2007『農業開発総合センター遺跡群Ⅳ（諏訪牟田遺跡・諏訪前遺跡・南原内堀遺跡・加治屋堀遺跡）』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 中村耕治・日高正人（編） 2006『農業開発総合センター遺跡群Ⅲ（尾ヶ原遺跡）』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 中村耕治・吉永正史・青崎和憲・長野眞一（編） 1984『高付遺跡』鹿屋市教育委員会
- 中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 pp.57-76 鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 中村直子 1993「中津野式土器に表れる地域色」『鹿児島考古』第27号 pp.74-82 鹿児島県考古学会
- 中村直子 1999a「南限の古式土師器」『人類史研究』第9号 pp.137-147 人類史研究会
- 中村直子 1999b「古墳地帯と無古墳地帯のコミュニケーション－南九州の土器をメディアとして－」『新しい関係性を求めて－コミュニケーションの諸相－』No.1 pp.63-71 鹿児島大学
- 中村直子 2000「鹿児島県出土の高杯の分類」『大河』第7号 pp.187-197 大河同人

- 中村直子 2009「7・8世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考－新東晃一代表還暦記念論文集』中巻 pp.119-128
- 中村直子 2012「井手上A遺跡（2次）SJ2出土土器について」出口順一郎・中村直子 2012『井手上A遺跡（1・2次）』pp.148-149 志布志市教育委員会
- 中村直子 2015「成川式土器の時代」『成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器－』pp.25-30 鹿児島大学総合研究博物館
- 中村直子・有馬孝一・前幸男・大西智和（編）1993『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅷ』鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 中村直子・大西智和（編）1997『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報11』鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 中村直子・新里貴之（編）2005『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報19』鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 永山修一 1993「『日本三代実録』に見える開聞岳噴火記事について」『橋牟礼川遺跡Ⅲ』pp.501-510 指宿市教育委員会
- 永山修一 2009『隼人と古代日本』同成社
- 永山修一 2011「大隅国桑原郡に関する若干の考察－柳ガ迫遺跡の理解のために－」深野信之（編）『柳ガ迫遺跡』始良市教育委員会
- 成尾英仁 1992「橋牟礼川遺跡の地質」『橋牟礼川遺跡Ⅲ』pp.511-522 指宿市教育委員会
- 抜水茂樹・繁昌正幸・富山孝一・黒川忠広・上床真・廣栄次（編）2007『持鉢松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 西園勝彦・東和幸（編）2005『山下堀頭遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 野邊盛雅・高岡和也・坂本佳代子（編）2004『中野西遺跡・松山田西遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 橋本達也 2008「岡崎古墳群における研究史と古墳群の構造」橋本達也・藤井大祐・甲斐康大（編）『大隅串良岡崎古墳群の研究』pp.32-40 鹿児島大学総合研究博物館
- 橋本達也 2018「古墳と南島社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 pp.411-446 国立歴史民俗博物館
- 橋本達也 2019「大隅・薩摩地域における古墳時代中期の集落と古墳」『集落と古墳の動態Ⅱ－古墳時代前期末～古墳時代中期』pp.217-230 九州前方後円墳研究会宮崎大会事務局
- 橋本達也・藤井大祐・甲斐康大（編）2008『大隅串良岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館
- 繁昌正幸・樋口めぐみ（編）2018『町田堀遺跡2』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 繁昌正幸・新屋敷久美子・中村有希・藤島伸一郎（編）2017『立小野堀遺跡1』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 東和幸・羽嶋敦洋・辻明啓（編）2012『稲荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 平古場秀男・倉元良文・有馬孝一（編）2020『六反ヶ丸遺跡1－A地点－』鹿児島県立埋蔵文化財センター

- 平島勇夫 1977「成川式土器」『つくし』No.7 pp.7-8 つくし古代文化研究会
- 平田信芳 1979「隼人が用いた土器－成川式土器－」『隼人文化』第5号 pp.37-44 隼人文化研究会
- 平田信芳・諏訪昭千代・彌榮久志・出口浩・吉永正史・立神次郎・池畑耕一・新東晃一・長野真一・西田茂（編）1978『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ』鹿児島県教育委員会
- 平田信芳・青崎和憲・中村耕治（編）1980『萩原遺跡（Ⅱ）』始良町教育委員会
- 平田信芳・新東晃一・牛ノ浜修・長野真一（編）1985『城山山頂遺跡』国分市教育委員会
- 平田信芳・戸崎勝洋・池畑耕一・出口浩・新東晃一・牛ノ浜修（編）1978『萩原遺跡』始良町教育委員会
- 藤井大祐・赤井文人・岩戸孝夫・中村友昭・松ヶ野恵・眞邊彩・嶺井やよい（編）2010『武遺跡H地点』鹿児島市教育委員会
- 藤井大祐（編）2017『栢ヶ丸遺跡』鹿児島市教育委員会
- 穂園さやか 2015「中津野式土器の甕－薩摩半島西岸部を対象に－」『七隈史学』第17号 pp.117-136 七隈史学会
- 本田道輝 1980「松木蘭遺跡出土の土器について」『鹿児島考古』第14号 pp.112-123 鹿児島県考古学会
- 本田道輝 1984「松木蘭1号住居址出土土器とその意義－松木蘭式土器の系譜をめぐって－」『鹿大史学』第32号 pp.1-8 鹿大史学会
- 本田道輝・豊見山禎（編）1986『鹿児島大学郡元団地内遺跡（J・7地点）』鹿児島大学理学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室
- 前迫亮一・横手浩二郎・日高正人・八木澤一郎（編）2007『堂園遺跡A地点・古殿諏訪陣跡・折戸平遺跡・山神迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 松崎大嗣 2014「成川式土器と古代土師器の「折衷型」－指宿市敷領遺跡十町地点出土の資料を中心に－」『Archaeology from the South II－新田栄治先生退職記念論文集』新田栄治先生退職記念事業会
- 松崎大嗣 2017「薩摩・大隅の古式土師器と在地土器」『九州島における古式土師器』pp.254-276 九州前方後円墳研究会
- 松崎大嗣 2019「西海道南部の土器生産」『大宰府学研究』第1集 pp.61-82 九州国立博物館福岡県立アジア交流センター
- 松崎大嗣 2020「九州南部における甌形土器の導入と変容」『日々の考古学3』pp.139-150 東海大学考古学研究室
- 松崎大嗣・中摩浩太郎・鎌田洋昭・西牟田瑛子（編）2018『橋牟礼川遺跡（Ⅵ区・Ⅶ区）』指宿市教育委員会
- 彌榮久志 1980「まとめ」井ノ上秀文・彌榮久志・中島哲郎（編）『橋牟礼川遺跡』指宿市教育委員会
- 彌榮久志（編）2003『武A・B・C遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 彌榮久志・野間口勇・田畑哲治・日高勝博・上床真（編）2009『領家西遺跡・天神平溝下遺跡』

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター
彌榮久志・平木場秀男・福永修一・石原田高広（編） 2005『南田代遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 彌榮久志・平木場秀男・福永修一・石原田高広（編） 2005『古市遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 三垣恵一（編） 2005『中尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 溝口学・東郷克利・森雄二・抜水茂樹・富山孝一・黒川忠広・上床真（編） 2008『上水流遺跡2』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 溝口学・森雄二・黒川忠広（編） 2009『下ノ原B遺跡』鹿児島県立舞初文化財センター
- 峯崎幸清（編） 1985『妻山元遺跡』国分市教育委員会
- 宮田栄二・牛ノ浜修（編） 1983『山門野遺跡』東町教育委員会
- 宮田栄二・平木場秀男（編） 2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 宮田洋一（編） 2002『池之頭遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 宗岡克英・倉元良文・繁昌正幸・江神めぐみ（編） 2016『白水B遺跡』鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
- 八木澤一郎・池畑耕一・吉井秀一郎・馬籠亮道（編） 2008『堂園遺跡B地点・堂園遺跡A地点（追加調査）』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 横山浩一 1985「型式論」『岩波講座日本考古学1』pp.43-78 岩波書店
- 吉永正史・中村耕治・松下孝幸・中谷昭二（編） 1986『岡崎4号墳・1号地下式横穴』串良町教育委員会
- 吉本正典 2006「7世紀の列島南西域－村落の諸相－」『Archaeology from the South－鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集』pp.161-177
- 米澤英昭・下田代清海（編） 2004『鶴喰遺跡（古墳時代（編））』都城市教育委員会
- 渡部徹也・鎌田洋昭（編） 2010『南丹波遺跡Ⅱ』指宿市教育委員会
- 渡部徹也（編） 2014『橋牟礼川遺跡』指宿市教育委員会